590-244
1200501525608
0
244

諸教の批判

松村介石著

諸教の批判

松村介石著

松村介石著

講教の規例

道會

帝國圖書館藏

松村介石著

諸教の批判

道會

昭和五年一月五日 帝國圖書館

590-244

序

本文に出て居るやうな關係より、讀賣新聞紙上に『諸教の批判』を掲載したところが、案外之が各方面に衝動を起して、我宗教界の一評判になつた樣である。そこで是非あれを別冊として出版して呉れとの注文が、諸方より來て居たところへ、友人前田武四郎氏の好意があつたので、早速此の書となつて、現はれて來た譯である。

そこで冒頭に言つた如く、啻に予輩が予が意見を書く許りでなく、諸方よりの駁擊批評を希望して居るのであるが、一向出て來ない。尤も出て來ない譯ではない、讀賣新聞に來て居るもの、予輩の所へ來て居るもの丈でも隨分ある。然しどうも素人筋の人が多いので、一つ骨

折つて相撲うて見やうと思ふのが少い。今のところでは、只だ大僧正本多君が出て來た位である。此れには甚だ失望した。佛法も各派に分れて、皆夫々知名の士が居る筈だ、基督敎も然り、神道も然りである。然るに一向出て來ないのは如何なる譯か、恐らくは一笑に付せられて居るでもあらう。さるにても此の革命時代に於ける宗敎界としては、甚だ不思議な現象と思ふ。故になほ各方面より玄人筋の議論が出て來るなら、再版の時に之を追加する積りであるから、其の議論の載つて居る新聞雜誌其他書物が出たならどうか我道會の方に知らして呉れ給へ。

最近英國のエフイシエンシー・マガヂンの主宰カッソン氏から『人生の意義』と云ふ新著を予輩の處に送つて來た、そして之を讀んで見ると、略々予輩と宗敎上の意見を同ふして居る、そして彼は今大聲叱呼して、既成宗敎は最う亡びた、我々は目下宗敎を持たぬ者となつたと言つて居る。斯う言ふ時に當つて、議論の無い筈がない、既成宗敎者諸君以て如何となす、と言ひたいのである。

昭和四年十二月十五日

著者

諸教の批判目次

緒論……一
先づ佛教者諸君に質す……三
次には基督者諸君に質す……五
次には神道者諸君に質す……七
釋迦に就て……九
耶蘇に就て……一一
孔子と儒教「上」……一三
孔子と儒教「下」……一五
低級の宗教……一八

宗教家簇出……二〇
閑題一言「上」……二二
閑題一言「下」……二四
知識と信仰「上」……二六
知識と信仰「下」……二八
道德と宗教「上」……二九
道德と宗教「下」……三一
靈的經驗と其種類……三三
予輩の靈的經驗「上」……三五
予輩の靈的經驗「下」……三七
宗教上、神が主として要求し給ふもの「上」……三九
宗教上、神が主として要求し給ふもの「下」……四一

予輩の神觀「上」……四三
予輩の神觀「下」……四五
一寸一息……四七
宗教家と人間社會……四九
宗教家と教化運動「上」……五一
宗教家と教化運動「下」……五三
結論「上」……五五
結論「中」……五七
結論「下」……五九
革命か改革か……六一
基督教を怎う說くか「上」……六二
基督教を怎う說くか「下」……六四

基督教者に忠告す……六七
我觀佛法……六九
佛教を今日怎う說く可き乎……七二
神道を如何に改革す可きか……七四
大尾……七六
宗教は六十からだ……七八
玄の又玄、衆妙の門……八〇
宗教學校……八二
宗教家總動員……八五
『諸教の批判』の批判に答ふ
松平俊子さまにお答する……八九

坂田博信氏にお答する……九〇
逢坂生に答ふ……九一
辻村楠造氏に答ふ……九二
『統一』誌に出た本多日生氏に答ふ……九三
『國教』誌に出た安房玉太郎氏に答ふ……一〇〇

諸教の批判　終

諸教の批判

松村介石著

緒論

讀賣新聞の宗教部の方が見えて何か又書けとの仰せである。そこで此度は一ツ思ひ切つて、諸教の批判を書いて見たい。

世人は誤つて思ふ、宗教家は平和を好むものである、忍耐の強きものである、總ての方面に幸福あれかしと禱るものである、故に世を罵り、人を責め、八方へ當り散らすやうなことはなさないものであると。然し其は宗教歴史の事實と違ふ、釋迦でも耶

蘇でも日蓮でもルーテルでも、皆猛烈に諸教即ち時の既成宗教を攻撃したものである。左れば予輩は不肖なれども、一ッ我鋒尖を此の諸教に向けて見たい。其の替りに其等の諸君よりも、うんと批評も反駁も攻撃もせられて見たい。

一體今日の日本人は、あまりに利巧になり過ぎた。殊に宗教家に於て然りである。互に讃め合ふやうなことはするが、互に攻撃するやうなことは成るべく避ける樣にして居る。予輩等が基督教の傳道に從事した青年時代には、佛教者を拉へて『此等の糞坊主』と罵れば、佛教者の方では、『此國賊奴』と遣り返して、壯んに論戰したものだ。然るに今は一向开んな事を聞かぬ。左れば此度海老名君と井上君とが此の新聞で討論會を始めたので大愉快を感じて居る譯だ。

勿論攻撃の爲めの攻撃でない、論難の爲めの論難でない、是非とも一ッ諸教の諸君に質して見たいことがあるからである。予輩も今日は己れ一個の意見を懷いて居る。されば一ッ之を諸君に愬へ、互に十分に討論して、其間に新しい眞理を見出したいと思ふのである。

怎うである諸君、予輩も本年七十一歳だが、ミルのオン・リバーチーを讀んで如何にもと思ふた、往時に若返つて出て來た。是れ今日の利巧主義、妥協主義に陷つて居る、我宗教界に一活氣を與へたいと思ふからである。一ッ論議をやらうでないか。

先づ佛教者諸君に質す

佛教では、これまで眞諦と俗諦との二ッを設け、一ッは玄人向、一ッは素人向として說いて來た。玄人向は直に法身に合するのを極意として來たから、お經も佛も何も要らぬが、素人はなか〳〵ソイッが六ケ敷い。ソコデお經が出來其のお經に出て居る人格的の諸佛を說き、ソラ觀音を信ぜよ、不動を拜めよ、阿彌陀に縋れよと敎へ、縱

今ひ此等は假説のものであるも眞實に之を信じ、眞實に之を拜んで居れば、遂に其法身に合することが出來ると謂ふところより、嘘も法便とやつて來た。然しモウ今日のやうに知識が普及して其素人にも眞諦と俗諦との區別や極意が分つて來ては、此迄とは餘程其説き方を違へねばなるまい。されば怎ういふ風に之を説く積りか、其を聞き度い。

尤も猶ほ一廉の學者や智者にして、否、一廉の坊さんにしても、佛教の奥義に無知無學の連中になると、矢張りお經に出て居る假説の佛や菩薩を眞の實在物として、之を信じ、之を拜して居るものが幾等もある。然し其れは知識の普及とともに段々と無くなつて來て居る。

過日も或る凝り固まつて居る法華經信者の一人に向ひ、君は法華經を以て釋迦が最後に説いた一番に高い一番に深い教理であると信じて居る樣だが、彼の法華經なるものは釋迦が説いたものでないぜ、釋迦滅後五六百年も後に出來たものであるぞと云つたら、目を睜き口を尖らかして怒つたが、然し怒つても仕樣が無い、今日の學問と知識がさう云ふのだと云ふところを説いて聞かせたら、終に大悄氣に悄氣たが、實に氣の毒であつた。

左れば諸君は此知識學問の開け來る今日、怎ういふ風に佛教を説かんとするか、予輩には予輩の意見があるが、其れは後日述ぶる事として先づ第一に質問を發したい。

次には基督者諸君に質す

キリスト教に就ては予輩も隨分ヒドイ目に遭つて苦しい經驗を持つて居るから人事のやうには思はぬ。

さて諸君、諸君は、まだバイブルを一點一畫も間違ひの無い天啓の書と信じて居ら

れるか。即ちキリストが處女マリヤより降誕したことを事實と信じて居らるゝか。耶蘇の十字架を信ぜねば神に對して犯した罪は赦されぬと信じて居られるか、此のキリスト教の救ひに預らぬものは永遠窮りなく火のきえぬ、虫のつきぬ、地獄に投げ入れらるゝものと信じて居らるゝか。左樣いふことはもう諸學者の研究の結果、已に信ぜられぬことゝなつて仕舞つて居るではないか。又復活に就ては近來出版せられた耶蘇の目擊談の一書を讀むと、左樣かなと思はるゝところもあるが、之を怎う觀らるゝか。予輩とても之を丸呑にするものではない。然し耶蘇の復活に就て一ッの新しい光を投げて居ると思ふ。

兎に角學問知識の進歩と宗教言論の自由になつた今日ほどキリスト教に大波瀾を起させて居る時代はない。ソコで質して見たいのは諸君の信仰と態度である。之れは佛教とも同じであるが。此迄說いて來た、又信じて來た事は、嘘となつた。然し信仰は理窟とは違ふ。鰯の頭でも信ずれば其頭より御光を拜することが出來るとの寸法より嘘と知つても之を人に信仰さすれば、現に其人の魂が救はれるから其れで善いでないかと謂はれるかも知れない。然し其處だ。予輩の質したいのは其處だ。乃ち其の心根は殊勝であるが、然し嘘は永く續かぬ。モー法便を說いたところで、かう知識學問の開けて來た今日は砂の上に字を書くやうなものだ。間もなく消えて仕舞ふ。之れは予輩の實驗談である。諸君以て如何となす。

次には神道者諸君に質す

神道にはお經とかバイブルとか云ふやうなものはない。ありとすれば先づ古事記か日本書紀位のものであらう。然るに明白に云ふと此著の最初に出て居るやうなものは所謂神話である。而し神話が其權威となるにはあまり幼稚であり、あまりに貧弱であ

る。又諸君が神ながらの道を説き給ふのは結構である、賛成である。然し其れには今日の學問知識を加へて説かねばなるまい。然るに諸君の内には此等の古書を權威として日本丈けが天つ神の特別に製造せられた國家であり、國土でありと説き其國體と皇室を説かるゝ上に於ても、今日の知識と學問とを度外視せらるゝ人が其間に尠くないやうである。予輩とても同じく日本の特別なる國體や、特別なる皇室を説くものである。然し斯んな古書によるのではない。

最近英國の『宗教革命會社』より秘密に出版したるハンナーの『セッキス・シンボリズム・イン・レリジョン』と云ふ本は佛耶神の三教者を通じて讀んで貰ひたい。殊に神道者諸君に讀んで貰ひたい。近頃歐米では續々とこんな本が出版せられて居るが大體から云ふと諸君の中には佛耶に比して廣く古今内外殊に歐米の新知識、新學問に接して居る人が多くないやうである。筧先生は予輩の友人であるが、其の神道を説かるゝところに一種の異彩を放つて居る。然し其でも公平に云ふと、まだ少しく牽強の處が無いでもない。

ソコで質問と云ふのは、兎に角神道は日本に生れて日本に發達して來た教で、佛耶の如く他より入つて來たものでないから、自重以て、今やウンと開け來る新知新學を包容し、茲に一大進化を遂げさせたいのである、佛耶は老熟より爛熟に入つた。然し神道は幼稚である。未成品である。故に其丈け前途に大希望がある。之を怎ういふ風に考へて居らるゝか。それが聞きたいのである。

釋迦に就て

釋迦は兎に角、眞面目な男であつたに相違ない。其の人生の老病死に惱んだ結果、到頭王家を捨てゝ山に籠り、而して難業苦業を積んで稽へ込んだところを見ると、今

日の諸教研究者が面白半分にやるのとは、其類を異にして居たことは云ふまでもない。然し難業苦業をして稽へ込んでヤット大悟したと云ふのだから、初めより八面玲瓏の佛でなく、矢張り人であつたに相違ない。而して已に人であつたとすれば、其の積りで彼を論ぜねばなるまい。

釋迦の大悟とは怎んな事を云ふのか、幾百千のお經に出て居ると云ふが、其は後作者の手に成つたものが多く、釋迦の本當に説いたのはどんなものか、佛教者諸君には其の研究がついて居るだらう。兎に角釋迦を人として觀ると、釋迦は孔子も知らず、ソクラテスも知らず、耶蘇も知らず、而して今日に開け來る諸科學即ち人類學、社會學も、宗教學も知らぬ、其點から云ふと、我輩等よりも無知無學の徒であつた。左れば其の悟つたと云ふ處もたいしたものではなからう。ソコで佛教者諸君に聞きたいのは今日此の進化し來れる人間たる我々が、何せ未だ釋迦に頭を下げねばならぬのか、何せまだ釋迦以上に出ることが出來ないのか。元來諸君が今日と比較すれば、まだ〳〵未開であつた時に出て來た汎神教たる印度哲學に根據を置いて居る佛教を、其儘既定の眞理として傳へんとするのが料見違ひでなからうか。其れは誰もが云ふ通り、日月古しと雖も猶ほ日に〳〵新に、又日に新なるとの議論も立つ。然し日月は开んなに澤山あるものでない。其れをお經に出て居る總てのものを權威として佛教を説かんとするのが、抑々の間違ひであるまいか。

耶蘇に就て

耶蘇の偉いところは其の神を本當に父の如くに感じ、自己の名利も、慾望も、生命も何もかも、皆神に捧げ、只神の命令のまゝに言動せんとした宗教的誠意と、其の精神とに在る。然し何と云つても三十ソコ〳〵の青年である。其知識に於て、其人格に於

て、其見識に於て、まだ〳〵未熟であつたことは爭はれない。彼れは今日發見せられた進化の理法や其理法の跡を知る由もない。其修養の工夫が足らぬところより、『神よ此杯をとり給へ』とか『神よ何ぞ予を棄て給ふや』など云ふやうな弱音を吐いて居る。たとひ直ぐに悔い改めて本來の念願に立ち還つたとは云へ、其處に到るとソクラテスや、陽明には及ばない。更に『歡び樂しめ天に於て汝等の慶賞多ければなり』など云ふ報酬道德を說いて居るが、之れは老子や孔子には、甚だ低しとして笑はれる筈のものである。

然るに今日の基督教者の中には耶蘇を完全無缺の人格者となし、基督中心說を唱へて居るものが尠くない。即ち佛者が今猶ほ釋迦に頭を下げて居る如く、耶蘇にも其の頭を下げて其前に拜伏して居る。頭を下げるもよろしい。拜伏するのもよろしい。然し其れは敬意を表するまでに止めて、何ぜ今日は耶蘇以上にならねばならぬと云ふやうな氣を起さぬのであるか。

耶蘇を愛して之を導き給ふた神は今猶儼存せられて居る。而して我等も亦耶蘇と同じ人間である以上、否、耶蘇の時代よりも萬事優れて居る時代に生れて居る以上、耶蘇の精神と、耶蘇の誠意と、耶蘇の努力を以てすれば、其神が我等をして耶蘇の如く否、耶蘇以上たらしめ給ふ筈である。

之れは佛者諸君に向ふて謂ふ如く、同じく基督教者諸君に向ふても、亦謂はんと欲するところのものである。

孔子と儒教「上」

孔子ほど醇乎として醇なる人格者は古今を通じて殆ど見當らないやうである。釋迦も、耶蘇も、ソクラテスも皆各々癖がある。然し孔子には其が無い。尤も支那人は口

と文章とには巧いものだから、巧く寫して置いたのかも知れない。其論語に出て居る徳教の如きは恐れ入つたものだ。故に徳教としては幾千百の佛典よりも、大勢で述べたり書いたりしたバイブルよりも、此の論語の一卷を推したいと思つて居る。尤もこの孔子も釋迦や耶蘇と同然で、今日より觀ると其言つて居ることにツマラヌものが無いではない。女子と小人は養ひ難しとか、民をして知らしむべからずなど云ふ處や、鄕黨の編に出て居るものゝ如きが其れである。不可を難しと解してもつまり同じことゝなる。

然り孔子は醇乎として醇なる人格者である。其徳教も諸教に優れて居る。然し孔子は稀に性と天道とを云ふたとある如く、其宗教に關する意見は尠く、却つて『未だ人に事る能はず、焉ぞ能く鬼に事へん』とか、『生を知らず、焉ぞ死を知らん』とか、『怪力亂神を語らず』とか、『鬼神を敬して之を遠ざく』とか云ふやうなことがあつて、後世孔子を學ぶものをして、何となく宗教を輕視するやうな傾向を招かしめたのは遺憾である。

尤も孔子の時には迷信が流行した。而して子路のやうな勇者でも之を信じて眞赤になつて居た。そこで孔子は此流行を見たり聞いたりして、眉をひそめて居た。故に宗教を度外視する氣でないが、先づ人道より始めよと說いたのであらう。予輩も今日一家の宗教を說いて、其團體を起して居るものであるが、モー耶蘇の弊に懲りて居るところより、最初より八ケ間敷く神や信仰を說かず、先づ精神修養より追々と宗教の方に入らしむる工夫を採て居る。然し孔子は到頭お仕舞まで其宗教の方を說かなかつたから、爾來今日に傳はる儒教に大缺陷を生じて來た。

孔子と儒教「下」

然らば孔子には宗教信が無かつたか、否、確に有つた。孔子の信じた本尊は天であ

つた。孔子は平素專ら德教を說いて居た。然しいよ〳〵危急の場合とか、失望した場合には忽ち其宗教心が現はれて『天德を予に生せり、桓魋其れ予を如何せん』とか『天の斯文を喪さゞる匡人其れ予を如何せん』とか『我を知るものは其れ天乎』とか云つて、其處に安心立命の訣を見出して居る。元來孔子は堯舜禹湯文武周公を祖述したと云ふ、然るに其等より出て居る書經や、禮記や易經などを見ると、其等はいづれも非常に宗教思想や宗教信には濃厚なものである。即ち上帝とか單に帝とか、天命とか、單に命とか、天より之を佑くとか、天威を降すとか云つたやうなことがベタにある。又論語に出て居るのは前述の如くであるが、其直經より採つた中庸などには『天之命之を性と謂ふ』とか『鬼神の德たる其れ盛なる乎矣』とか『上天の載は聲もなく臭もなく至れるかな』とか云ふやうなことが載つて居る。然るに今日に傳はる儒教には此の天に對する觀念や信仰が甚だ乏しい。

彼れ陽明や其學者等が此儒教より出たとすれば、更に堯舜禹湯文武周公の直經にもどつて『天の靈に賴る』とか、『皇天に對す』とか、『事天の一途』とかと說て、餘程宗教的になつて居る、又宋儒は『道の本源は天に出づ』とか謂つて、到底宗教までに到らねば道德も根無し草となるぞと教へて居る。然し其れでも此等の兩教とも堯舜禹湯文武周公の如く常に此天に禱り、此天に感謝すると云ふ處までには行つて居ない。予輩の觀るところでは、本當に堯舜禹湯文武周公の道を奉ずるものならば、是非とも十分に此宗教心を發揮せねばならぬと思ふ。孔子は迷信の大流行した時であるから、わざと宗教の方面をあまり說かなかつたが、然し其孔子の心に在つた此宗教の方面を閑却して居ることは儒教の本意でない。乃ち今日の儒教者は十分に孔子を學び得ず、而して儒教に大缺陷を來して居る所以である。

低級の宗教

低級の宗教とは、怎んな宗教を謂ふのか、天理教や大本教や不動や觀音や其他諸神佛の中で、專ら御利益を主として說く宗教其物を謂ふのである。

佛教でも耶蘇教でも回教でもソクラテス教でも皆御利益を說いて居る。其内儒教には此御利益說法が一番に鮮い。然し其れでも『祿其中に在り』と云ふて居る。其れは此等の宗教なるものは唯り高等の連中にばかり說くのでなく、一般の民衆に說くのだから、先づ其等の者を諭し導く爲め、是れ亦た止むを得ないことゝせねばならぬ。然し佛教でも、耶蘇教でも、御利益が主でない。即身即佛だ、愛だ、義だ、道だと說くのが本筋である。

然るに幾多の偶像教は勿論の事、彼等前述にかゝる諸宗教即ち專ら御利益を說くもの、又は其御利益を信ずるものは、僅か五厘か一錢かの御賽錢を投じて、家内安全、息災延命、商賣繁昌と祈り、そしてトント夫婦喧嘩を愼み、衛生に注意し、一生懸命に稼ぐと云ふやうな、道德方面に志さず、互に我儘を云ひ張り、身自らは不養生をなし、懶けて遊んで居て、其れで五厘か一錢のはした金で神や佛を買收せんとして居るのだから不心得も亦甚だしい。

然るに今日一廉の連中が其宗教に屬し、其本尊の前に帽を脫し、頭を低れ、拍手以て其御利益を祈つて居る。噴飯せざらんと欲するも能はずである。

阿彌陀や、觀音や、不動尊は、前述の如くであるが、然し其れは方便としてだから先づ可としても天理教や、大本教、其他諸神諸佛に屬する御利益宗は、本筋より觀ると低いもので論ずるに足らぬ。且つ國常立の尊や、天理王の尊を本尊として居るやうだが、其等の諸神を實在物とする權威は何處に在るぞ。況んや今日に開け來る心靈的現象を利用して人を驚かし、其處に權威があると謂ふに至つては、知つて謂ふものは惡むべく、知らずして有難がるものは氣の毒なりと謂ふべきである。

新宗教家の簇出

近頃、我國に新宗教が簇出し始めた、曰く何々教々々、々々と、而して堂々と署名して色々の説が雑誌に載つたり、書物になつて出て來る。予輩は成るべく其説や其書物を讀む樣にして居るが、怎も敵本で、本物と思ふものが甚だ尠い。中には至極眞面目なのもあるが、然し怎も宗教や宗教歴史に就ては無學で、素人を驚かすことは出來やうが、玄人に笑はれるものが多い。

先日も横須賀の或處へ講演の依頼に應じて出て行つたところが、海軍の或將官が一人の老人を紹介して、『此は先生と同じく道は一なりと唱へ、此に新宗教を唱へて居る方である』と云はれるから會つて見ると、色々と其の意見を云ふから、其れは其の通り至極同意である。然し道は一なりと云ふ事は古今東西を通じて色々の哲學者や色々の宗教家が隨分論じたものだが、誰某の其論や、誰某の其説を讀んだかと問ふと、何も知らない無學の徒であつた。そこで非常な卓見の樣に云ふから、少しく馬鹿らしくなり『失禮だが、遼東の豕といふことがあるからな』と云つて歸つて來た。

一體、今日新宗教の主唱者など唱へて出て來る人は、十分に今古東西に亘る宗教や其歴史や其人物を學び、其の上に己れ一個の見識と體驗とを積んで、出て來たものであらねばならぬ。博士であらうが、政治家であらうが、著名の士であらうが、苟も堂々と署名して雑誌に載せたり、書物に出す位の志あるものならば、宗教の各方面に明るきのみならず、又其の唱ふる宗教を悟得し、之を體驗し、之を心證し、之を味はひ、之を樂しみ、本當に之を難有がつて居るものであらねばならぬ。然るに學思驗の此の三方に缺くるところありながら、尚且つ大宗教者の如く吹聽して出て來るものゝ如きは寧ろ世に對し、人に對して失敬である。

閑題一言「上」

さて、佛教も基督教も神道も儒教も低級宗も新宗教家をも、思ひ切つて批評して來た。或は破壞して來た。然し予輩の所願は批評ばかりでない。破壞ばかりでない。之れに就て一々予輩の意見を述べたいのである。即ち建設したいのである。

鰯の頭でも、假設神でも、假設佛でも、人作物でも、迷信でも、妄想でも、苟くも眞實として之を信じて居れば其れで救はれるのであるから、決して之を笑ふたり、破壞したりしたくは無いのである。然し知識學問の開け來る今日では其れが六ヶ敷い。否、續かないからモウ其說き方を變へねばならないでないかと謂ふのである。而して然らば何う說くのかと云へば、恁う說くのかと云へば、恁う說きたい。恁う說くべしと謂ひたいのである。佛教やキリスト教や神道や儒教を打ち毀すのでない。之を立て直したいのである。

然し其れにしても從來の諸宗教の諸說を、今猶其儘に信じて居る方にとつては氣の毒である。殆んど忍びないと思ふほどである。其れは予輩も其苦しき經驗を持つて居るが、今迄本物であると思ふて居るものが僞物であると判つた時ほど自失、落膽することはないのである。而して其結果、全く無宗教になり、從つて無道德になり、自暴自棄に陷ることが無いではない。之れは予輩の友人の中にも其例が幾等もあるのだから、實を云ふとこんな事は云ひたくないのである。然しモーそんな姑息な態度をとつて居ることが出來ない。其れは今のまゝで置くと、日本人の全體が皆な無宗教になるか、左もなくば益々迷信に深入するばかりであるからである。故に破壞せられた方も失望するに及ばぬ。諸君の迷信の代りに予輩が一つ正信を與へてあげるつもりであるから。

閑題一言「下」

今日の讀賣新聞記者の言に依ると連日連載する此『諸教の批判』に對して駁擊文の到着して居ることが山の如しとある。實に愉快に堪へぬ。該記者の御說の如く目下の日本人が宗教に唾つて居ないことが分つて有難い。

然し其れならば隨分諸宗教者を怒らせたであらう。彼等に信仰上の煩悶をも惹き起させたであらう。そこで一寸玆に我が結論を云つて置くから、其んなに神經を尖らせないやう希ひたい。即ち前に云ふ通り、予輩はウント一度は旣成宗教を破壞する。然し破壞が目的でない建設が目的である。而して之れは知識階級の人には分つて居るが、一般の讀者には分るまいから云ふて置くが、凡そ宗教を說く時には其說法に四條ある。一に曰く奪ふて與へず、二に曰く與へて奪はず、三に曰く彼を奪ひ此を與ふ、四に曰く奪はず與へず、是である。

そこで今は奪ふて居る最中だが直ぐに與へる時が來る。而して其與へる時が來ると、佛教もよろしい、耶蘇教もよろしい、神道もよろしい、儒教もよろしい、否、低級宗教も皆よろしい、一切の偶像教も皆よろしい、と謂ふところまで來るのであるから、ソウ遽に怒つたり煩悶したり、落膽したりせずして待つて居てくれ給へ。

耶蘇曰く、予は豫言者を棄つる爲に來らず、却つて之を成就せんが爲に來れりと。然り何事でも何物でも破壞する丈けなら易い。批評する丈けなら誰にでも出來る。人の缺點や行動を非難する丈なら大勇氣を以て之を行ふことが出來る、然し其れなら君には如何の建設的、積極的意見がある乎、君の行動は怎うだと云はるれば、默さねばならぬことが多い。が、予輩は开んな無責任な態度はとらぬつもりだ。

知識と信仰「上」

モー少し破壞の必要がある。能く雜草を拔除して置かぬと、眞實の種を蒔いても十分に生長せぬからである。

宗教家若くは其信者は動もすれば則ち謂ふ信仰と知識とは違ふ宗教は理窟でない、其以上のものである。私には學問知識がない、哲學も知らぬ、神學も知らぬ、歷史も知らぬが、たゞ正直に信仰するばかりであると謂ふ。然し其れが寔に可笑しなのだ。學問知識を通さずして怎うして釋迦や耶蘇を知つたのだ。

彼れお經やバイブルに在ることを眞實間違ひ無いと信ずるのみと謂ふが、怎うして其のお經やバイブルの存在を知つたのだ。之れ皆知識より出て居るのでないか。畢竟するに知識を無視して信仰も成り立たぬことゝなるのである。

彼等は又謂ふ。法華經が釋迦滅後五六百年後に出來ようが、ヨハネ傳が基督滅後二百年頃に出來ようが一向構はぬ。つまり釋迦や耶蘇の體驗と其の信仰とを傳へたものだから、之を釋迦や耶蘇の說いたものとするも差支へないと、又た釋迦や耶蘇につける奇蹟的記事が、後人の作であらうが、一向差障りない。

釋迦は法身と合し、耶蘇は神と一になつて居る、故にこれを法身其者、神其者と說いても可いでないかと。然し予輩の聞くのは其れではない。歷史上の事實如何である。然るに此返答を曖昧にして置いて、直ぐに說法するから、其處に大弱點を暴露して居るぞと云ひたいのである。

つまり宗教は知識以上としても既に學者が研究して、歷史上の事實となつて居ることは之を否定することは出來ないぞ。故に先づ此の事實を承諾するか承諾せぬかに明答を與へて置いて、而して其の說法に出でよと謂ふのである。

知識と信仰「下」

知識を無視しては信仰は成立せぬ。然し知識丈けでは眞の宗教とならぬ。科學は事實を土臺として立證するもの、而して哲學は科學を土臺として推理するものである。然し科學は勿論、哲學も奥へ奥へと、その何物何故を續けて行くと、結局は返答の出來ない解らないものとなるのである。そこで信仰と云ふものが起つて來る。

此科學や哲學ばかりで論ずると有神論も立てば、無神論も立つ、汎神論も立てば、一神論も立つ。而して更に此二者を合して汎神的一神教と謂ふものも出て來る。

人日學者々々と謂ふが、今日の學者などに分つて居ることは海濱の一砂のみ。燭を暗中に點ずれば其の光のとゞく處丈けは明るい。

而も其以外の周圍は眞暗で何物があるかサッパリ分らぬ。然し人間と云ふ奴は分らぬと云ふだけでは滿足が出來ぬ。いつでも次から次へと穿索して行き、此は何物か何

故かと尋ね、而して其處に己れ一個の信仰なるものを起し來る。故に眞の信仰なるものは今日開け來る科學や哲學の上に立つものであらねばならぬが、然し今日の知識丈では宗教を生じない。されば科學哲學の上に一歩を進めて信仰となるのであるが、更に其の信仰が其の人の宗教となるには、啻に其の信仰の如何を知るのみならず、其信仰を味ひ其信仰を樂み、其信仰を體驗して居るものであらねばならぬ。然るに世には一廉の僧侶や牧師でありながら、其れが唯だ知識上ばかりに止り、其れが己れの生命となつて居らぬものが尠くない、此等は眞の宗教から謂ふと門外漢である。

道德と宗教「上」

宗教家には其の說くところに反して、案外にも不道德家が多い。消極的に云ふと、

案外にも立派な人間が尠い。これは一體どういふ譯か。佛教は他力と自力、キリスト教は信仰と行狀、此の兩面を說く、而して佛教は謂ふ『とても見性成佛』など云ふやうなことは凡夫には六ケ敷い、故にたゞ阿彌陀に賴れよ、さらば如何なる罪障も皆消滅する』と。そこで自然と修德に骨折らぬ樣になるから小俗の人間に墮して了ふ。キリスト教は云ふ『我等は母の胎內より罪人として生れて來て居る。故にとても自ら救ふことが出來ない。たゞキリストの十字架に縋るより外はない』と。そこで人格上には弱い人間となつて了ふ。

然し其れでは一向價値の無いものとなるから、更に自力の行ひを說き、佛教では難業苦業や鍛練をやらせ、基督教では種々と德義の勵行を勸む。然し佛教は汎神教より出て居り、汎神教の究極は善惡無二、醜美一如となるのであるから、凡俗に向つては諸惡莫作、衆善奉行などゝ說くものゝ、本人は之を卑しと觀るから、知らず〳〵不品行と慾張りの人間となつて反省せざるに至る。又基督の基督教は、此の道德の方面に於て實に嚴しいものであつた。汝の目罪を犯さば拔きて之を棄てよ、とまで說いた。而して贖罪などのことはサッパリ言はなかつたのである。然し後から出て來た保羅は、己れがパリサイ宗で懲り〳〵して居るところより、主として信仰と贖罪とを說き、今日に傳はつて居るバイブルは、多くその系統に屬して居るので、今日の基督教者は、これ亦た知らず〳〵此の修德の工夫を怠る樣になつて了つて居るのである。

道德と宗教「下」

然し何と云つても、不道德はいけない。宗教者であらうが、無宗教者であらうが、有神論者であらうが、無神論者であらうが、名利に驅られたり、物慾に支配せられたり、不品行したり、不埒を働くやうな下劣な人間は論ずるに足らぬ。

そこで然らば如何にせば其の道德家になれるか。其教には何宗が可かと云ふに、諸宗皆其れ〳〵の流儀を持つて居るが、予輩は此德教に於ては矢張り儒教が一番に可と思ふ。殊に其實行を主とする點より、陽明的儒教が可と思ふ。そこで先づ道德即ち精神修養の方面より入れと主張する、予輩は、求道者に向つて、道會四書と、王陽明の詩集とを讀ませ、之を講義してやるやうにして居る。然し前云ふた通り、德教丈けで宗教まで行かずば、無根草となるから、必ず宗教を說くのだが、宗教としては、矢張り基督教が第一であると思ふ。勿論基督教も前云ふ通りだから、其枯枝や作り花や知的に誤つて居るものは採ることが出來ぬ。然し其の神を父とし君として事へる其の孝情と忠情と、其生命的熱情に至つては、兎ても神儒佛の及ぶところでないと思ふ。尤も熱情丈けより云ふと、低級宗教には其れが餘るほど十分あるも、之れは前云ふ通りである。然し此の儒、耶ともに其の道ふところ、教ふるところが多く人間間に局して居て、宇宙大に及ぶことが尠いが、其處に至ると佛教の方が偉い。佛教にも色々ある。然し其の禪の大悟に至ると宗祖を呑み、經典を呑み、國家を呑み、世界を呑み、宇宙を呑み、茲に眞如其物となつて現れ來るのだから偉い。尤も此の大悟はなか〳〵容易でない。そこで世に禪を學んで悟つた積りで居る者は、大抵野狐禪か左もなくば素人向きの應用禪に陷つて居るものだ。

靈的經驗と其種類

諸宗教とも從來は其證據を主として知識の方面において論じて來た。然るに近來になつて所謂靈的經驗なるものを云ひ出して來た。前に云ふ如く、科學と哲學だけでは諸物を解決することが出來ない。怎せお仕舞には分らなくなるからだ。故に是非とも其上に信仰なるものが起つて來ねばならぬのである。然るに其信仰で進んで居ると

茲に一種不思議な現象を體驗する。之を靈的經驗と謂ふ。

即ち神を有るものと信じて進んで居ると、其神を身自ら感ずる樣になる。或時は吾實眼で見ることもある。或時は心の内で其姿を拜することもある。又或時は其眼と同樣に、同じく實耳、心耳で、其聲を聞くことがある。而して祈禱すると其祈禱に顯著なる感應のあることや、怎うしても神の御指導若くはお救ひであると思はれるやうなことを體驗する。而して之れは事實である、實際である。

然るに其れに二種類がある。一は眞物で、一つは外道である。眞物は至誠若くは道念より發して之を體驗するもの、外道は唯だ奇蹟的若くは異能其物に接して有難がるもの所謂神降とか、御神託とか、お告とか、お筆先とか、其他今日に開け來る神靈現象の種々相を執へて、其處に其不思議を示し、其れ見ろ此に神が御座る、此に佛が御座る、此に大靈の力がこの通りであると立證して、此に其信者を作るのである。

今日我國の處々に流行して居る今神樣や、今佛樣の遺つて居るのは皆此外道に外ならぬ。否、從來の既成宗教も皆此外道を遺つて其信者を作つたものである。然し本當の連中は之を遺りながらも『姦惡なる世は徵候を要む』と述べ『これは凡俗を導く方便である』と說いて居る。

予輩の靈的經驗「上」

予輩には怎んな靈的經驗があるか。他事と同じやうに、此靈的經驗にも多少と濃薄との別がある。然るに予輩には此が多濃なのである。

學者は此靈的に多濃なるものを指して神秘派といふ。此神秘派は學ぶよりも思ふ方だ。知識を追及するよりも祈禱する方だ。

予輩が基督教に入つたのは此靈的よりである。此れは拙著『信仰五十年』に委しく

書いて置いたが、予輩が十八才の時、横濱の宣教師のバラ學校で、毎夕此のバラ氏のやる聖書の講義に對して愚弄半分の言を吐いたところ、或朝バラ氏を尋ねると居ない。何處かと探して居ると一室で聲がする。叩いても返辭がないから、耳を澄して聞いて見ると切りに予輩の名を連發して居る。始めて知つた、之れは予輩の爲に祈つて居るのであつた。此時は何とも云はれぬ感に打たれた。因て其後は少し謹んで居たが、復た理窟に合はぬことを云ふから、更に暴言を吐て寄宿の室に歸つて來ると、其夜俄かに予輩の靈魂が覺醒し始めた。而して切りと予輩を責める。曰く、汝は眞面目なものを愚弄するか、又如何に間違つて居ても、彼等は誠に之を信じて居るのである。故に此の誠意に對して暴言を吐くのは汝が善くない。又汝は眞に神を無いものと思ふか、基督教の謂ふ神は汝が儒教より學んだ上帝ではないか、又汝の内心を顧みよ、恥しいこと、汚いこと、惡いことが幾等もあるではないか、故に苦し神が存在して居るなら、汝は何と申譯するぞと、此處に於てか、予輩は此靈魂の覺醒と同時に現に神が我頭上に出現したまふ如くに思はれて堪らぬから大改悔の上、二階に居るクリスチャンに祈禱して貰はんと登つて行くと、丁度其時數人のクリスチャンが集つて、未信者殊に予輩の爲めに祈禱會を開いて居るところであつたので、予輩の告白と共に一同わつと泣き崩れたのであつた。

予輩の靈的經驗「下」

今より三十年以前にもならうと思ふ。井上哲次郎、元良勇次郎兩君等が主催で、帝大の庭上で、宗教家と教育家の懇談會が開かれた、而して其時予輩も其招待に預つた處が、此時分丁度ゼームスが『宗教的經驗の種々相』と云ふ名書を著はしてから間もないことで、元良君が予輩に向つて、此靈的經驗を要められたので之をやつたが、其

時予輩の前に近角常觀君が、其最近其身に起つた見佛の靈的經驗を語られたから、予輩が遠慮なく、近角君に對し、其れは靈的經驗の初歩であると云つた樣に覺えて居る。

然り、前に云つた横濱での靈的經驗の如きは極めて初歩である。予輩は其後五十年間引續いて此の神に祈り、此の神の御指導を仰いで居るが、殆んど此の靈的經驗の連續である。而して今日では段々と奥へ進んで來た。今其大なるものを擧ぐるなら、前述のが第一回。第二回は病氣にかゝつて進退谷つて神に死を要求した時に得た經驗。第三回は備中高梁で牧師をして居た時大リバイバルが起つた時に得た經驗。第四回は鎌倉に引込んで歴史を研究し、前途何を爲さんと考へて、海濱の砂上を歩んで居ると、俄かに天外に聲ある如く覺えて、汝は何を考へて居る、汝は夙に一身を宗教に擲つと誓つたもの、今更己れの名利を追つて何處に行くぞと叱られ、茲に道會を起すに至れる經驗。而して今日では此神が君でなく、全く慈父に事へて居る、即ち連續的靈的經驗を持つて居るのである。

予輩は徒らに自身のことを吹聽したり、之を誇るものでもない、唯諸宗教諸君の中の其れが聞きたいのと、又之を云つて置いて宗教の歸着するところを論じたいからである。尤も此靈的方面はあまり云ひたくないのである。之を云ふと、御利益宗の迷信家や、心靈的の外道の紫が出て來て、朱を奪ふからである。

宗教上、神が主として要求し給ふもの　「上」

知識を無視しては眞の信仰は成立たぬ。然し宗教上、神が主として要求し給ふものは、知識よりも至誠である。他宗教よりも色々と之れが例證を擧ぐることが出來ようが、先づ基督教丈けで云ふならばペテロ、ヤコブ、ポーロ三使徒に對する神の態度である、ヤコブは純基督教を奉じて居たので、勿論信仰の必要をも説いたが、然し行爲の伴

はざる信仰は空であると說いた。ポーロは又行爲の必要を認めたが、然し神に義とせらるゝは行爲でなく、信仰であると說いた。而してペテロは此間に介つて一寸困つた樣子で、猶太人と異邦人とに對する態度を異にして居た。そこでこの三人の間に議論が起つた。然し神は其の意見や議論の相違に關せず齊しく双方を愛し、之れに聖靈を下し給うた。其れは其意見や議論に對してゞなく、其の神に事ふ至誠に對してゞある。即ち至誠は皆齊しく持つて居たからである。又宗教改革の三傑ルーテル、カルビン、ズイングリーに對しても同じであつた。彼れ三傑は議論し乍らも、兎に角一緒に傳道した、然しルーテルはズイングリーと其の意見を異にした爲め、ズイングリーの握手せんとした時之を拒絶し、殆ど絶交を宣言した。カルビンも亦其神學に重きを置き、更に此二人とは其意見を異にして居た。然し神の待遇は此の三人に對して同一であつた。其れは彼等も亦齊しく至誠の人であつたからである。

神が知識上の意見で人を採り給ふとならば、極めて少數の人の神で、萬人の神ではない。神は知識を奬勵し給ふ。然し其萬人を採り給ふのは主として然らず、主として萬人の心の裡に在る至誠其物である。之を三使徒も三傑も未だ悟つて居なかつたらしい。

宗教上、神が主として要求し給ふもの　「下」

神が偶像教者、若くは低級宗教者に對し給ふ態度も亦同じ事である。

偶像教者若しくは低級宗教者は其知識の缺乏より、鰯の頭を眞の神、若くは佛と信じて拜んで居る。而して之れは馬鹿々々しい事である。然し其の靈的經驗を聞いて見ると、彼大知識大高德の其れと同じやうなものを持つて居る。此れは一體怎ういふ譯か。其れは、知識上より觀れば笑ふべきである。又氣の毒とも謂ふべきであるが、然

し其の自ら神若くは佛に對する至誠には、彼れ大知識大高德と少しも異つたところがないからである。

神は何處にも在し給ふ。故に鰯の頭に對して拜んで居やうが、阿彌陀や、觀音や、不動の假神假佛に對して拜んで居やうが、其の拜んで居る處には必ず神が御座るのである。故に至誠さへ我にあれば神が之を受納れ給ふのである。

尤も繰り返して謂つて置くが、其れだからと云つて鰯の頭で滿足してはならぬ。神は無學者を憐れみ給ふとも、褒め給はぬ。迷信者を可愛相に想ひ給ふとも、其れで可とは云ひ給はぬ。即ち其信仰は學問知識の進歩と共に、崩れて行くものであるからである。

又繰返して謂つて置くが、幾等熱信であつても、眞赤になつても、道念を離れ、單に己れに對する御利益を念ずるものではいけない。否、縱ひ御利益を念ずるにしても、親の爲めとか、君の爲とか、國の爲とかで、之を念ずるものであらねばならぬ。即ち神は至誠を求め給ふからである。

予輩の神觀「上」

世に一神教と汎神教と不可思議との三種がある。而して此三種共知識上丈けでは行詰る。

一神教は神が天地萬物を造つたと謂ふ、左れば何物で其を造つたか。零は幾等重ねても零である。無より有は出て來ない筈。左ればつまり神があつて、其神より其有が出て來たとなるから、矢張り此萬有が神となることになつて行詰る。然らば萬有が神か。萬有が神なら味噌も糞も皆神となる。扨んなものが拜めるかとなるから、此れも亦行詰る。そこで不可思議論が出て來る。つまり有限の人が無限の神を識ることは出

來ない。相對で物を識る人間が絶對を思議することは出來ないと云ふ。而して終に不可解と解釋して行詰る。

左れば天地萬有は何物ぞ。サッパリ皆解らぬかと云ふに左樣でない。たとひ終には行詰るにせよ、此天地萬有が偶然に出來て、盲目的に動いて居るものとは思へない。之に法あり、道あり、智慧あり、意匠あり、即ち怎うも心があるやうに思はれる。そこで科學と哲學とに一歩を進めた信仰となり、此の信仰より此心ある神を認めることになる。

神が人格か、人格でないか。此議論も亦行詰る。此の廣大無邊の神を小さな人格にして仕舞ふのはヘンなものだ。其れは人間を萬有中一番偉いものにした手前味噌である。然し不人格では拜めぬから、汎神教では止むなく佛や如來も引張り出して來て之を拜む樣になる、又人格として拜む一神教すら怎うしても萬有を神の外に置くことが出來ないので、さてこそ神の遍在性を說くやうになつて來る。

怎んな事は識者には夙に分つて居るのだが、一般の讀者の爲に玆に一言して置き、而して予輩の神觀を陳べたいのである。

予輩の神觀「下」

予輩も五十年間の宗教生活中には、可なり宗教上に於ける學問知識の方面に惱み、惱むと同時に、一躍其上の信仰を進め、身自ら此の神を靈覺せんと骨折り、そこで得たところの神觀は怎うである。

海老名、井上兩君の議論は一神教と汎神教とに於ける古い〳〵議論で、其處に何等新しいものを見出さない。其れよりも兩君が今日得て居る、信じて居る、靈覺して居る、其神如何を聞きたいものだ。予輩は知識上此神を人格と斷定しない。然し一神教

たる基督教より入つて、此神を人格と信じ、之を拜し、之に祈禱して居たところが、今日では此神が前述の如く、恰も慈父のやうになつて仕舞つた。そこで又此の萬有に對する靈覺如何と云ふに勿論之を神と思ふことは出來ない。然し星を觀て其處に神の御光が現はれ、花を見ても其處に神の御姿が拜まれ、馬の嘶く聲、水の流れる音を聞いても、其れが神の御言であると覺えるので有難いこと限りなしである。

神が萬物の上にあるか、其内に在るか、斉んな知識的議論は先づ第二にして置いて、兎に角予輩は此の靈覺で神に事へ、又萬有に接して居る。

諸君或は問はん、如何にせば其靈覺を得ることが出來るかと。然し其方法は恁うだと之を一言で云ふことは出來ない。而して其れが即ち靈覺なのである。

眞如と云ふ原字は英語で as such 即ち「こんな物」となる相であるが其意味は能く知らぬ。然しこんな物とは面白い。其本體を聞かれても、口では云へない。然し身自らは確に之を悟覺してゐる。故に『こんなもの』とより云へない。我が魂の存在は確に之を認識して居る。然し其魂は『どんな物だ』と聞かるれば、矢張り『こんな物』とより外答へる事が出來ない。佛教でも、基督教でも、一神教でも、汎神教でも、つまり悟得自知するところに大極意があるのである。

一寸一息

一寸こゝらで進路を轉じて申上げたいことが二ツある。

さて字數と回數とに注文があるので、ナカ〳〵骨が折れるが、然し先づ大分奪つたり、與へたりして來たつもりだ。即ち破壞したり建設したりして來た積りだ。而して前に約束した事を大半は成就したつもりだ。尤も結論にはまだならぬ。

そこで一息して云ひたい其の一ッは、先づ駁擊者に對してゞある。已に二人まで此

の欄内に現はれて來た。而して續々と予輩の手許まで讀賣新聞宗教部の方より送り來て居る。然し怎も、一ッ力瘤を入れて相撲つて見たいと思ふのが一ッもない。そこで孰れも偉い方ではあらうが、實に閉口して居る。予輩も已惚れであらうが。幕の内とは云はぬが、二段目位はとるつもりだ。然るにヘロ〳〵した素人相撲に出られては、とる氣になれぬのも無理ではあるまい。イヤ之れは失禮した、予輩は怎も丁寧な言語を使ふことが不得手で困る。心で思ふ事を其儘云ふので、言語の上で人を怒らせることがある。然し其の代り予輩に向つて、狸爺父でも、高慢野郎でも、何でも構はぬ云つて呉れ給へ、少しも怒らぬからそこで無理でもあらうが、せめて二段目位に出てほしい、幕の内が出て呉れゝば猶有難い、尤も讀賣新聞に出た丈けの分には御答へする。然し其れは云ふ丈けの事を言つて仕舞つた後にする。之れが一ッ。

モ一ッは此諸教の應用、即ち活動に對してゞある。諸宗教の祖師は教育家として出て來たのではない。學者として出て來たのではない。皆孰れも人を思ひ、世を思ひ、國を思ひ、之を救はんが爲めに志士仁人として出て來たのである。然るに爾來其教を奉ずるものは往々にして、此の祖師の念願を離れ、而して經文の註釋や、教義の議論に沒頭して、此の人を思ひ、世を思ひ、國を思ひ、其諸教を實際に應用せしめて大活躍を開始することを忘れて居る。是れ予輩が今日の宗教家に向ひ、一言云はざるを得ざるゆえんである。故に之れより進路を其方面に轉ずることゝする。

宗教家と人間社會

前述の如く宗教家の本職は、人間社會を救ふに在る。天國に救はるゝことばかり考へて居てはならぬ。極樂往生ばかりを念じて居てはならぬ。更に進んで其眼光を此の人間社會に伸さねばならぬ。ソコで此人間社會を支配して居る、第一の勢力は政治である

から、先づ此の政治と接觸せねばならぬ。先づ此政治を指導せねばならぬ、即ち先づ此の政治家を救はねばならぬ。

何故に今日の政治家がこんなに腐敗墮落したか。先づ其の政治が惡いからだ。而して其の政治の惡いのは其の政治家に人物が居ないからだ。而して彼等に宗教道德の素養の無いのは、今日の宗教家が彼等を敎へず、却つて彼等に追從するからだ。

一昨年であつたか、後藤氏が政治倫理化とか何とか唱へて、運動した時、諸宗敎の重立を呼んで馳走して、其席で『さて諸君這度こういふ運動を始めた、是非とも諸君の賛助を戴きたい』といふやうな挨拶を爲したが、其態度が如何にも傲慢であつたので、餘り面白く思はなかつた。然し僧侶から出た一人が衆を代表して之れに答へ、先づ後藤閣下と冐頭して、閣下が臺灣又は滿洲に於て擧げられたる政蹟は何うの、此うのと切りに頌德表を奉つた。予輩は馬鹿々々しくてたまらなかつた。ソコで後藤と呼び捨てにしたかつたのだが、一寸遠慮して先生と呼び、『先生そんな事は問題でない、元來諸宗敎の本職が其れなのである、予輩の如きは此の四十年來其「政治の倫理化」を絶叫して居るのだ。先生の今日此處に目醒めて下さつたのは有難い。予輩には精神があつても運動費がないのだ。只困るのは其れだ。然るに先生のやうな有力者が此運動に加はつて下さるのは嬉しい』と云つたら、一寸怒つて何か云ひ出したが、モー予輩は好い加減にして置くと、流石は覓先生だ。覓先生が直ちに予輩に次で、又た後藤氏の言に一擊を加へられたので、此會は遂に有耶無耶になつて散會して仕舞つたが、其時予輩は此等の宗敎家の重立を見て物の哀れを感ぜざるを得なかつた。

宗教家と教化運動「上」

此れも亦た同じ事である。政府は頻りと危險思想とか、思想善導とか云て騷で居る、

而して其の騒ぐのは無理ではない。國民の思想が益々危險になるばかりであるからである。ソコで宗教家を集めて、之を謀る、之れも御尤である。予輩も彼の民力涵養の時より、内務省の依頼に應じて、其に參加し、今も中央教化團體や、東京府の其れの役員になつて居る、然し何時も厭な事を云ふので、餘り當局の人等には好かれて居ないやうに感じて居る。怎な厭な事を云ふのか、曰く『危險思想とか、思想善導とか云ふが、其の之を起さす大原因は、政府大官等の上に在るのだ。政黨の腐敗墮落は怎だ、疑獄の續出は怎だ、御詔勅には義は君臣なりと雖ども情は猶ほ父子の如しとある。即ち國民は皆陛下の赤子である。されば國民一般を陛下の赤子として取扱はねばならぬ筈なのに、一方で稼でも〳〵一家を養ふ能はず、親子諸共自殺するものあるに引替へ、一方では、惡い事を爲しながら、奢りに奢りて、上流社會と威張て居るものがある。之では思想も惡化しやうでないか。然るに政府は一向此方面に警戒を加へぬ、華族富豪の中には、まだ〳〵反省しないものが多いやうだ。之れでは迚ても、予輩等の思想惡化防止の講演も利き目がない譯だ』云々と。

ソコで先般も華族の某が、怎して思想善導するのだと講釋せられたから、其の方に向つて、貴君は華族なのだ、丁度其人である、民間の思想善導は僕等がやるから、貴君等は一ッ華族や富豪に向つて、警戒若くは大叱責の舌を向けてくれ給へと云つたやうな事であつた。

宗教家と教化運動「下」

此度は文部省が主となつて、更に此の思想善導の大運動を開始した、而して又々宗教家を集めて相談した、否、寧ろ宗教家を集めて之をやらせるやうな形になつて居る。毎度厭な事を云ふのだが、今度の文部省の計畫には、一回も招かれなかつた。招か

れなかつたから、燒餅やいて云ふのでないが、實は招かれても行かぬつもりで居た。其れは民力涵養以來、中央政府や、地方官憲の依賴に應じて、勤儉貯蓄などの講演に出掛て行つた。然るに一生懸命に說法して喰ふや喰はずに居るものをして、ヤット貯蓄せしめて、之を銀行に預けさせた處、其銀行が潰れて、面目次第もないことになつて仕舞つた。其れも監督の責任ある政府が何の責をも負はず、其重役が何の責をも責はず、其重役が何の所罰を受けず、却て金をチョロマカして逃げて仕舞ひ、馬鹿を見たのは、予輩の言を聞て貯蓄した可憐れな細民であつた。噫斯な事であるから、又々其役目を引受ける氣になれぬのは無理ではなからう。

されば宗教家は何をして居るのだ。先づ此政治家より善導して行かねばならぬでないか。此の惡化の原泉より淸めて行かねばならぬでないか、然るに何時も政治家に使嗾せらるゝ形で、何時も其提灯を持て踊て居る樣な態度を示すとは何事ぞ。

予輩等はモー一生懸命だ。マルクスに欺かれロシヤに煽てられて、眞赤になつて居る連中を諭し、之を聞かねば嚴罰に處せよと云ふのが予輩等の叫びである。然し此際最も我鋒尖を向けたいのは、彼れ惡政黨の不埒、華族富豪等の不心得、我陛下の思召に協はざる行動をなして憚らざる上流社會の連中だ、而して誰れにも賴らぬ、獨立獨步だ、是れ止むなく、上野公園の辻說法とまで奮發したゆえんである。

結論「上」

お約束の三十回も、いよ〳〵結論に近づいた。ソコで一ッ繰返して結んで置きたいが、予輩は好んで破壞したくないのである。欣んで惡言を放つのでない、グズ〳〵して居ると日本國民が段々無宗教になり、從つて無道德になり、一身を亡ぼし、國家を滅すことになるから、モー默つて居れぬからだ。

左れば諸宗教者諸君は、前述にかゝる予輩の言に接して、何んと考へ給ふか。一向手應がない。松平俊子氏や、坂田博信氏の辯駁文と云ふのが出て來たから、悅んで讀んで見たが、どうもお答へするまでの事もない。松村は佛教も能く知らぬ、佛教哲學は恁んなものだぞと講釋した位なので、議論にはならぬ。

然り、モー玄人筋には予輩の云つたやうな事は夙に解つて居る筈だから、何を今更松村が云ふのだ位に取扱はれるであらう。サアそこだ、そこがいけないと云ふのだ。ソコで我が議論を結ぶと、第一には、开んな嘘を說いて居ては今に其嘘が分る、君等の說いて起させた信仰が潰れて仕舞ふから、何にもならぬと云ふこと。第二には开んな嘘や法便を說かずとも、眞實を說いて十分に其正信を起させることが出來るでないかと云ふこと。第三は從來の祖師やお經に拘泥するから無理が出來る。人間進化の今日科學哲學の上に一歩を進めて信仰に入り、信仰を說けよと云ふこと。第四には知識と信仰とを併有して、而して自得體驗の境に入るを以て極意とする事。第五には宗教本來の目的は人心を救ひ、社會を救ひ、國家を救ふ上に在るぞと云ふこと等である。

結論「中」

吁諸君、今や天下の諸教は皆革命的時期に際して居る。今より十五年以前、予輩は一ッ歐米を廻つて、此宗教革命の機運が怎ういふ風に向つて居るか、又諸宗教家が此の對策を如何に考へて居るかを知らんと欲し、彼の地の大學や、大教會に名を知られて居る人々に會つて質して來た。

予輩曰く、君等は宣教師を派せて、基督教を傳へて吳れたが、予輩等は眞赤になつて之を信じ、一ッ身を基督教に捧げて一生懸命の仕事をして來た。然るに今日になつて見ると、其の信じた教理の大半が知識學問の爲に、嘘と分つた。處女降誕も、バイ

ブル不謬も、贖罪説も、天國地獄も信じられなくなつて馬鹿を見た、君等は今日怎う基督を説くつもりかと詰つたら、彼等は大息して、其は君ばかりの問題でない、天下擧げての大問題だと言ひ、色々と意見を交換して來た。

然し歐米でも其幾千年教へて來た、奉じて來た基督教に大缺陷を生じて來たので、大恐慌を來して居るのである。其教會では從前の通り、矢張り舊信仰に從つて說法して居る。然しモウ知識學問を追究する青年學生等は其に耳を傾けぬ。故に青年學生の教會に出席して居るものは極めて少數である。而して此青年學生が無宗教になり、從つて無道德になり、モー歐米も羅馬の末路と同じものになりつゝある。故に彼の國の有志の心配は一通りでないのである。

結論「下」

ソコで予輩は三四十年以前より、此の趨勢を看取したので色々と考へて居たが、到頭二十五年以前より道會なる一の宗教團を起して其任に當つて居るが、つまるところ、今日迄我が得たる學知と體驗とを以てするに、分け登る麓の途は異なれど、結局は一ッとなる、同じ高嶺の月を見る哉である而して之は古い〳〵言葉で少しも新しい事ではない。然し其光輝はいつも新しいものだ。此月は活て居る。孔子は支那より此月を拜せよと云ひ、釋迦は印度より此月を拜せよと云ひ、耶蘇は猶太より此月を拜せよと云つた。然るに其弟子等は、此月を拜せずして孔子や釋迦や耶蘇の指を拜んで居るから、別々に分れて爭ふて居るのだ。而して此說は佛教の傑物で千年以前唱へた說だ。然り東洋には古來如此いふ卓見を吐いたものが幾等もある。故に今日宗教革命の先驅者たるものは、我が東洋殊に今日では我日本であらねばならぬ。我黨は高言に似たりと雖も

茲に此の卓見と體驗とを提げて、彼等歐米人の目を醒してやりたいと思ふてゐる。

左るにても我諸宗教者諸君は何をして居られるのだ。宗教革命どころか內輪喧嘩ばかりをして居り、而して此腐敗墮落した政黨政治を攻擊するどころか、却つて之に追從して居る。而して國民は塗炭に苦しみ、國家は危機に瀕し、不穩の情勢は全國に漲つて居る。之を凝つと見て居れやうか。予輩が狂せんばかりに暴言を吐くのも無理ではあるまい。

前に申した如く、先づ三十回と云ふのであるから、まだ〳〵言ひ度い事があつたのであるが、兎に角之で結論として置くと、又々讀賣新聞の方が見えて、あれでは怎うも事足らない、又先生の云はれた事が、結ばれて居らない、と云はれるから、それは實にそうである。予輩ももう少し書かないと、本當の結論にはなつて居らぬが、先づ約束だから之で結論として置いた。併しまだ書けと云ふなら、何ぼでもある、五十回でも百回でも書くと云ふと、それならもう七八回で本當の大尾にして下さいと、云はれたから、それで以下のものは其增補として出したのである。

革命か改革か

今より七八年前ほど以前と覺ゆ、鶴見の總持寺の伊藤道海君より賴まれて、あの百疊敷の大廣間で、世界宗教の趨勢と題して、一場の講演を試みた後で、予輩が新井石禪君に向ひ『君は此頃米國へ行て歸られたとの事であるが、彼の國の宗教の趨勢を怎う見られて來た。今日存在する既成宗教は、革命か將た改革かの二途に迫つて居る。君は何方を行るつもりか、予輩は基督教を改革するつもりで、日本教會と名乘つて出て來たが、怎うも基督教の連中がブツ〳〵云つて承知しない。そこで今度は革命と定め、其名稱を道會と改め、茲に何宗と名乘らない一個の新しい宗教團體を起すに至つた。予輩より觀ると、革命も改革も、其實を云へば同じ物だ、釋迦は當時の宗教界に

革命を起して、佛教と云ふ一の新な宗教を開創した、然し、從來の印度教を改革したと云へば云へる。耶蘇は同じく當時の宗教界に革命を起して、基督教の開祖となつた、然し猶太教を改革したと云へば云へぬこともない。何となれば兩方とも其の根據を舊宗教に置いて居り、其の大部分はあまり變つて居ないからである。尤も釋迦も耶蘇も別に新しい宗教を起す氣でも何でもなかつた。釋迦は唯だ涅槃解脱の法を說いたばかり、耶蘇は唯だ道と眞と生命を說いたばかりである。君は果して何方を行るつもりかと尋ねたら、まだ其處までは考へて居ないとの返事であつた。

基督教を怎う說くか　「上」

そこで一つ予輩の立場を云ふが、予輩が基督教を改革するとなるならば、怎う說くのである。曰く『今日までの基督教の教理には色々の迷信や、人作や、虛僞を交へて居るので、知識學問の開け來る今日では、世間に通用しなくなつた。然し基督教としての根本教理は依然として變らない、バイブルの不謬說の如き、基督の處女降誕說の如き、贖罪說の如き、原罪より來る天國地獄の說の如きは、皆否定してよろしい、信じなくてよろしい、否、信ずるに足らぬものとなつた。然し天地主宰の神を父とし、君として拜することゝ、之れに感謝し、之に祈禱を捧げることは、今日開け來る知識學問に影響されない。即ち信神は今日の科學哲學の上に立つ正信である、體驗である、之れが基督教の本尊であるから、唯之を確りと把へて居れば其れでよろしいのである。次には修德である、是れも耶蘇が力を盡して說いたものだ、神に感謝し神に祈禱し、神に信賴するばかりでは不可ない、努力一番精神修養に盡さねばならぬ、第三には愛隣である、基督教の他教に秀でゝ居るのは社會奉仕の事業である、唯己れ一個が天國に救はるゝことを念ずるばかりが基督教でない、一身より家庭、家庭より社會、社會より

590
244

國家全體に神の意を奉ぜしめねばならぬ。即ち天國を此世に建設せしむるのが其主張である。第四には永生である、此永生の信仰は各宗にもある、然し基督教ほどハッキリして居ない、此の信仰は近代開け來る心靈の研究によつて益々強固になつて來た、左れば此の綱領を信ぜよ、而して實行せよ、之れが純粹無雜の基督教である』と。而して恁う說けば其れで改革的基督教とも、新基督教ともなつて現はれることが出來るでないか。

予輩は此の革命的基督教を說く爲めに、日本教會を起したのだつた。

基督教を怎う說くか　「下」

ソコで此日本教會を起して、此新基督教を說くつもりであつたから、矢張り他の基督教と同じく、說教の前に聖書を讀み、讃美歌を歌ひ、基督の名によつて祈つて居た。然し段々變になつて來た。此の聖書の中に誤謬がある、此讃美歌の中に我黨が信ぜぬ神學說がある、故に終には之を讀んだり、歌つたりするのが厭になつて來た。又基督の贖罪を信ぜぬから、基督の名に依つて祈ることも亦無意味になり、間もなく皆之を廢めることになり、段々と基督教の形式より遠ざかることになつた。

其處へ以て來て、ユニテリアン協會で『自由基督教の集會』と云ふやうな名で、予輩を呼びに來たから、村井君と二人で出掛けて行くと、海老名彈正君や、安部磯雄君や、內ケ崎、岸本、三並の諸君も居たやうに覺ふが、予輩が此等の諸君に向ひ、『時に諸君にきくが、予輩は基督教を傳ふる積りだが、基督を中心とせぬ、基督が微かつても基督教は立つと思ふが怎ぢや』と聞くと、海老名君が第一に發言して『イヤ基督の無い基督教は成立たぬ』と云ひ、岸本君を除くの外皆之れに讃同したから『其れでは僕等は此仲間でない』と云つて歸つて仕舞つた。其上爾來基督教の機關なる諸雜誌を讀

590
244

むと、皆予輩の主張を基督教でないと云ふやうだから、ア、面倒臭い、其れなら基督教でなくて可いぞと定め、そこで名を道會と改稱して今日に至り、今日では改革のつもりで革命となり、何宗にも屬せぬ一箇の新宗教團體となつて居る譯である。

然し問題は猶殘つて居た、宗教は生れるもので、造らるべきものでない。松村が四綱領を提げて新宗教を起さんとするが、それが物にならうか、理窟は左樣でも其れは生ける宗教となるか、それはなるまいとの事であつた、然るに論より證據がある、今日我道會では無宗教より入つて來るものが多いが、其れが涙を流して我神に感謝と祈禱をするものとなつて居る、『來つて見よ』である。

基督教者に忠告す

左樣すると『道會』は新宗教か舊宗教か、曰く、革命したと云へば新宗教となるし、改革したと云へば舊宗教となる。然らば何方か、之を主唱する汝は何と謂ふか、と云へば何とも云はない。何方でも諸君の云ふやうにするがよろしい。予輩は唯予輩が多年の間に學知した、又靈覺した、又體驗した、而して眞に今日有難いと思ふて居るものを說いて、共に與に此の信仰に入れよと人々に勸めて居るばかりである。

然し基督教から出て來たものであるから、故鄕忘じ難しで、何處までも、心の底より基督教者に忠告したいものを持つて居る。而して其れは是れである。曰く、モー今日に開け來る知識學問を無視しては、基督教の擴まる氣遣ひはない、嘘は永く續かぬ。加之其れは人を誤らすことゝなる。何となれば、其人が何時しか其の信ずるものゝ嘘であると目醒むる時には、非常な苦悶を其人に與へ、其人をして其信仰を失はしむると同時

590
244

に、動もするとヤケを起して、竟に不信仰不道徳の人たらしむる虞れがあるからである。否虞ればかりでない、現に予輩も其の危險に罹つたし、又現に基督教の先輩の、其に罹つたのを見て居るからである。

故に惡いことは云はぬ、早く基督教を改革して、今予輩の云つたやうに說き給へ。而して之れが本當の基督教であると云つて出て來給へ。左樣すれば前に述ふ如く、宗教としては矢張り基督教の上に出るものが無いから、今日の日本は愚か、世界の基督教の改革者となり、又其先驅者となり、其れで歐米までをも率ゐて行くことが出來るに相違ないと思ふからである。

諸君は何故まだ目が覺めぬか。ヨハネ傳に載つて居る耶蘇の言に曰く『エルサレムにも非ず、又此山にも非ず、神は靈なれば拜するものも亦靈と誠を以て拜すべきのみ、今其時になれり』とあるでないか、此の言は耶蘇の云つたものではあるまい、耶蘇よりもモット見識の高いものゝ言であらう。然し何方でもよろしい。君等の信ずるバイブルに載つて居るでないか。否、予輩より謂はしむれば、Fatherfood of God, Brotherfood of man. 丈けを說いても基督教の特別性は認めらるべきものである。又其實際に於ては『心を盡し、意を盡し力を盡して、主たる汝の神を愛せよ、是れ第一の誡なり、第二も之と同じ、己れの如く汝の隣を愛せよ』(馬可十二の二八)との二教でも、優に世界を濶步する大宗教たるを得るのである。復た何ぞ末節に拘泥して、自ら滅亡することを爲すや。

我觀佛法

教佛は二千年を經て種々に進化し、幾萬のお經となり、幾十の宗派となり、幾多の教義に分れて居る。故に之を一言で云ふのは六ヶ敷い。然し玄人筋には大抵統一した

590
244

ものがある。然らば其れは怎んなものか。曰く、佛教は智を第一となし、悟るを以て極意となす。左れば何を悟るのか。曰く、此天地萬有は一物より出て居る。而して天地萬有と分れて居るのは、つまり此一物の權化變化に外ならぬ。而して此天地萬有の間に因果の法ありて、之を支配して居るが、人間も亦其支配の下に在るのである。ソコで幾等力んでも人間が此法より離るゝことは出來ないから、消極より云へば、此法に服從せねばならぬと諦めること、積極より云へば、之を悟つて其法に合心し合體して行くこと是れである。

尤も其根本が汎神教である。故に天地萬有と云ひ、法と云ひ、一物と云つたところで、自らも亦其一物の外に出でないから、つまり還元返本以て權化以前變化以前の其一物即ち絶對とも、法身とも、眞如とも、空在とも云ふ物其物に合し、無始、無終、無限、無窮、不生不滅の理を覺知するに在る。故に本當の處から云ふと、向つて拜むものも、祈るものも、感謝するものも、何にも無いから、宗教ではなく、哲理の悟得に止まるのである。

然し其れ丈けでは、何うも人間と生れて來たもの、心を滿足せしむるとが六ケ敷い。否、眞に其を悟覺し來れば、其れで十分滿足が出來るのであるが、其れは極めて少數の人に限り、迚も一般人に六ケ敷いから、さてこそ其の一物を諸神や諸佛に權化せしめて、之を拜ませ、之れに祈り、之れに感謝せしむるやうにしたのである。而して其れが今日普通の佛教となつて居るのである。

於此佛教諸君は謂はん、耶蘇あがりの松村が何を知るものか、耶蘇の方面を說くのは當つて居るか知らぬが、到頭佛教で尻尾を出した、それは彼だ、これは此だと定めて口を尖らせ給ふであらう、よろしい。一ッ其議論を聞きませう。然し斷つて置くが、各派各經に分れた議論では不可ない。其統一した處を云つてくれ給へ。

590
244

佛教を今日怎う説く可き乎

ソコで今日の佛教を怎う説くべきかと云ふに、モー假神假佛を説かぬことだ、否、説いたところで、其假神假佛たることが分つて仕舞へば其効能がないから、サッパリと之を廢め、阿彌陀も觀音も不動も皆之を拜まないでも可いものと大膽に之を告白し、而して上根者即ち玄人筋に向つては、直に眞如若しくは法身其物に合すべきを説き、下根即ち一般の素人筋に向つては、眞如若しくは法身其物を拜せよと説くべきである。

然し其合身を説くにしても、往時の様に隻手の聲だの趙州の無だの、开んな謎のやうな廻り遠いことを云はず、直に諸君が靈覺して居る、體驗して居る、悟道其物を説き給へ。尤も其れは所謂る以天合天の工夫で、口以て言ふべからずである。其れを言へる丈け云ふのだ、而して其を己の行動の上に示してやるのだ。

又一般の人には阿彌陀や觀音や不動の代りに、法身の祭壇を作つて、之に祈念を籠めさせることである。然しながら前述の如く一神教も、汎神教も、理論丈ではつまり行詰まるから、其の上に信仰を加へ、其信仰を段々進めて行くと、一神教が汎神教に入り、汎神教が一神教にならずば、つまり十分に吾人の宗教心を滿足せしむることが六ケ敷いから、否、予輩は確に之を實驗して居る。而して恐らくは諸君も之を實驗して居られるのであらうから、神が人格であらうが無からうが、法身の正體が何物であらうが、つまり我等が人格である以上、先づ人格として之を拜し、之に祈り、之に感謝するやうにならねば本物になることが出來ない。

故に彼れ智以て一水萬波の理を悟つたり、因果の法で支配せられてゐるものと諦めたりするばかりで了るものは、眞の宗教から云ふと門外漢である。

靈的經驗から云ふと、まだ〳〵神や法身の眞を知らぬものである。まだ玄妙の奥に到つて居らぬものであると思ふが如何。

590
244

神道を如何に改革す可きか

神道を如何に改革すべきか、神道は宗教か、宗教でないか。單に我皇神を始め、其他國家に大關係ある諸人格を祭り、之に尊崇敬拜の儀を捧ぐると云ふ丈けなら宗教でない。然し之に祈願を籠めるものも無いではない。而して已に之に祈願を籠むとなれば、宗教となる。左れば何方が本當か。實の處其さへハッキリとして居ないほど、幼稚なものである。斯くて又之れに祈願を籠める宗教として之を觀ると、即ち多神教となる。而して多神教となれば、宗教進化の方より觀ると、是れ亦幼稚時代のものである。尤も一つを得れば二つなし、有るかと思へば形なし、無きかと思へば御靈あり、之を大元の神と申奉るとあるから、つまりは法身より出て來た假神假佛と同じく一神教に歸する。

ソコで予輩の提唱する改革案と云ふのは、丁度佛教者諸君に申したと同じ事で、モー今日は此んな幼稚な多神教の形や宗儀を取らず、ズット溯つて天の御中主の神に至り、之を其本尊として祭り、之に感謝し、之に祈禱を捧ぐるやうになしては如何。尤も法身と云ひ、此の天ッ神と云ひ、元來形の無きものであるから、之を拜め、之れに感謝祈禱せよと云つたところで標象が無いから凡俗は困る。凡俗が困るから、此迄は止むなく方便を用ひ、猶太教は祭壇を造り、基督教はマリヤや使徒の畫や像を造り、佛教は假神假佛を拵へ、神道は多神教を其儘利用したものであるが、モー今日は其時でない。神は靈なれば拜するものは皆靈と誠を以て拜すべしと說くべきである。否、左樣しなければ、今日のやうに進んだ學理に融ふたる宗教となることが、出來ないと思ふ。諸君以て如何となす。

590
244

大尾

此處まで書いて來たが、讀賣の方より、後がつかへて居るから早く締めてくれ、との事だから、是れで大尾とする。

猶ほ『如何に儒教を改革すべきか』や『外道や低級宗教者を如何に指導すべきや』諸教の極意の『玄の又玄衆妙の門』や『宗教は六十歳からだ』や其の他の建設的積極的に書きたいことが澤山ある。

加之大乘から云ふと、今日の日本を此儘袖手傍觀して居るのは、眞の宗教家の態度でない。故に積極的に寺院や神社や教會を利用して、大活動を開始すべき具體案をも云ひたいし、更に今日の宗教學校は皆駄目だ、あれでは往時のやうな豪い僧侶や宗教家が出て來ない。故に是非とも之を改造しなければならぬ。而して其れに就ての具體案もある。然し先づ此度は此れ丈けにして置く。

さるにても讀賣新聞宗教部の大量宏度に感服した。今に止めて呉れとの御通知があらうと思ひつゝ、毎々〳〵原稿を書いて來たところが、到頭こゝまで書かせてくれた。こんな激烈の事を、遠慮なく書いたのを載せて下されたに就ては、隨分方々の支障を生じて、色々と御迷惑をかけたことでもあらうから、只々感謝の外はない。

又駁撃文は此方より望んで居るところだが、之を一々讀賣新聞に出せば、予輩の答辯をも出さねばならぬことゝなるから、迚ても出來まい。されば諸教には夫々機關がある、其れでドシ〳〵やつつけてくれ給へ。予輩も『道』と云ふ機關があるから、其れでお答へをする。左樣ならば、之れにてお暇とし、謹んで讀者諸君の御辛抱を謝す。

讀賣新聞に出したのは、本文と增補と二ツ合はせて右の如くである。併し尙ほ書き度いものがあると云ふ事を、大尾の中に書いて置いたので、以下の四項目は、此の書出版に際して、更に書き加へたものである。而して『如何に儒教を改革すべきか』だの『外道や低級宗教者を如何に指導す可きや』だの、其の他建設的積極的に書き度い事が澤山あると、大尾の中に云つて置いたが、實に其の通りで、まだ〳〵澤山ある、併し先づ今度は、此の位の事にして置いて、更に別著として出す事があらうと思ふ。

590
244

宗教は六十からだ

孔子は六十にして耳順ふと云つたが、善く言つた。如何にも六十歳になると、各方面が分るから、耳順ふだ、而して各方面が分つて來ると、モー一方聞きの人間と議論する氣になれない。孟子は吾四十にして心を動かさずと云つた。陽明は四十餘年醉夢の中と云つた、孔子は四十にして惑はずと云つた、而して更に五十にして漸く天命を知ると云つた。實際上の體驗は面白いものだ。

然るに宗教家の樣な、始終人を教へて居るばかりの連中は、モー三十頃よりソロ〳〵大家になり、四十には大天狗となり、五十には神さまとなり、而して六十になると、此迄人を教へて自ら教へずに居るから、ソロ〳〵降り坂になり、新しい書物を讀まぬから、新知識は亡くなり、反省を怠るから、人格が上らず、實際上にばかり當て居るから、大見識、大抱負がなくなり、モー終には論ずるに足らぬものとなつて仕舞ふ。

予輩には何の取柄もない、然し何か一ッ取るべきものがあるなら、進んで止まらないと云ふ此一事だ。青年時代より苦學して時間が無かつたから、何事も友人には負て後れた。然し何苦楚、今に見ろ、大器晩成だと力んで、龜歩牛行でやつて來た、左れば其の御影か、六十歳になつて見ると、今まで餘程上の方に居たと思つて居た知人等が、其知識に於ても、其人格に於ても、其見識に於ても、其抱負に於ても、其元氣精神に於ても、いつしか下の方になつて居る。ソコで諸宗教家に御尋ねするが、諸君の體驗果して如何。予輩の體驗に依ると、神や、人生や、宇宙や、永遠に關する諸宗教問題は、何と云つても、六十からでなければ、本當に分らぬ。大死一番とか、名利脫却とか、誠則明とかなど云ふことは、早くより人にも教へ、我も隨分工夫に從事したものだが、實際に此等を超脫して、眞に神と共に逍遙遊するところの佳境は、六十歳に

590
244

至て、始めて味ふことが出來た、否、前に云ふ通り、孔子は六十になつて、耳順したと云つたが、矢張り此處等の消息を云つたのだらうと思ふが、諸君の體驗果して如何。

玄の又玄、衆妙の門

此れは老子の言であるが、老子は何處程まで行て居たか、此の言を發する以上は、大分奥へ行つて居たやうだ。成るほど玄の又玄、衆妙の門だ。口で云ふことが出來ず、筆で書くことが出來ず、形容で悟すことが出來ず、眞如と同じやうに、あんなものだ、こんなものだと云ふより外に仕方がない。所謂る以天合天、數あつて其間に存するもので、拈華微笑より外に仕方がない。

イヤ神は超越だ、イヤ神は遍在だ、イヤ義とは此の意味だ、仁とは此心だ、一如は彼だ、差別は此だと云ふやうな講釋は、モー說きたくなくなる。空非空非々空、非々々空だ。イヤ先生其れではサッパリ解りませぬと云ふ、其は解らぬのが本當だ。誰だつて初めから一躍して其處に往くものでない。イロハから段々入つて行くのだ。エービーシーから段々進んで行くのだ。故に今日は唯だ之を聞くばかりにして置きなさい、逐々と解るからと云ふより外に仕方がない。

然し面白いな、難有いな、或時は大雷となり、或時は細雨となり、或時は戟を執て起ち、或時は鍬を手にして耕し、或時は大官を罵り、或時は稚子を撫し、或時は六合に飛び、或時は密に隱れ、其の味ひ極まりなしだ。

左れば世の俗人俗物は論ずるに足らぬが、苟も宗教を以て任ずる諸君が何事ぞ、イヤ管長の選擧騷ぎだ、イヤ其學校の騷ぎ、イヤ法主の除籍だ、イヤ傳來の家憲だ、イヤ座席がどうの、イヤ等級がどうのと、本氣で开な事が云へたものか。其れは宇宙を呑吐して居ても、人生に居る以上は、其等の事にも心配もしてやらねばなるまい、然

590
244

し己れ自身が其渦中に在て、己れの利權を爭ふやうなことは、馬鹿々々しくして出來るものでない筈である。牛と云はゞ牛だ、馬と云はゞ馬だ、而してソコに無上の愉快を感ずる筈でないか。然則ち今日現在する諸宗教家の心的狀態果して如何、折角多年宗教に其身を投じながら、俗人俗物の樂を樂みとし、而して此の玄妙の大愉快を知らぬと云ふのは、太牢を舍てゝ、腐鼠に喝するのと同じでないか。敢て諸君の胸懷を問ふ。

宗教學校

今の宗教學校は、文部省の規定に從ふ中學又は大學までをも設置して、普通教育より進んで專門科を教へて居る、之は決して惡いことではない。然し今のやうな教へ方では斷じて偉物の出る筈がない。

世間並の教育を施すことは、世間並の學校や教育者に任せて置くのがよろしい、然し宗教學校には、宗教學校の使命がある、目的がある、即ち宗教其れ〴〵の教義と主張を以て、人の魂を救ひ、世の腐敗を淨め、國家の隆盛を圖り、世界人類の祝福に貢獻すべきである。

左れば开なに大勢の生徒を望む必要はない、先づ中學卒業程度のもので、其身を宗教生活に投じ度いと志願する者、若しくは宗教的訓練を受け度いと思ふものゝみを四方に募り、之れに必要なる學科のみを授け、主として宗教的人格を養成することに努むれば、則ち其れで可いのである。

左れば怎いふ風に其等の生徒を教育すべきか、曰く、其宗義の教授、次で其に關する新舊の科學、哲學、歷史、傳記等を教へ、之に加ふるに先進先覺の體驗を以てし、先づ宗教範圍の知識に於ては、世の學者に劣らぬものとなし、其れより精神修養に移り、大死一番や、寂然不動や、心身脫落や、名利脫却や、宇宙呑吐や、神身合一の工

590
244

夫に大徹底を期せしめ、富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はざる大丈夫たらしむべく指導し、乃ち知學と愛と義と權威とを以て、上は王公相將より、下は一般の衆生に至るまで、己れ一個の安立の道と、天と人と國家に對する義務責任を悟得せしめ、世上に大活躍を演ずる人物を養成すべきである。

要するところは、今のやうな世に逢迎する教育、聲聞を主とする教育、己ばかりの教育、機械的教育、死んだ教育を廢め、教場に入つては、新知新學を得、密室若しくは山林に入つては、思索祈念に耽り、而して物に當り事に應じて、其の得たる知學と體驗と力と德とを實地に働かして行く、眞劍的宗教家を造るに在るのである。

宗教家の總動員

教化運動と題したところに陳べた如く、今日の宗教家が、文部省や內務省の招集に應じ、其の指揮を受けて、始めて教化運動と騷ぎ出すやうなことは、實に宗教家の恥辱である。今日の宗教家なるものは、我より進んで此の文部や內務の大官等を叱責し、何を云ふのだ、教化さるべきものは、寧ろ諸君等であるぞ、人心の惡化とか、危險思想とか云ふが、此の世を惡化するもの、此の危險思想を釀成するものは、實以て諸君よりであるぞ、彼れ疑獄問題は何事ぞ、此れ泥合戰は何事ぞ、年が年中朋黨比周して、日々に國家を頽廢に導くものは實に君等でないか、よくマア我等に向ふて、鐵面皮にも开な事が云へたものだと、警め、諭し、教へ、其心と行とを改めしむべきである。然るを何事ぞ、今猶ほ大臣等の前に頭を下げ、ハイ〳〵と其下に動いて、其黨爭の具に供せらるゝやうな愚を取るべきでないと、大に自覺すべきである。

590
244

然らば其具體案は如何、曰く、茲に宗教家皆相寄り、相謀つて日本全國に教化の大運動を起すに在るのだ。曰く、然らば其方法如何、曰く、佛者は其寺々に於て、神道者は其神社々々に於て、基督教者は其各派の教會に於て、毎日〳〵其界隈の民衆を集め、先づ我が今日の政治界に其鋒尖を向け、而して斯く叫ぶべきである。

民衆諸君、君等は此有難き立憲の盛代に生れながら、何を今日爲て居るのだ、何を今日云て居るのだ、イヤ人氣が惡くなつた、イヤ不景氣だ、イヤ此れでは遣り切れないと、而して只管悄氣て弱つて居る、何たる態ぞ。此等は皆政治が其當を得ざるからだ、而して政治が其當を得ざるは、政治家が惡いからだ、而して政治家の惡いのは、畢竟諸君の罪だ。即ち諸君が其選擧をつゝしまぬからだ。ソコで具體的に之を云ふならば、今度の總選擧には、今日迄の政黨員を撰ばぬことだ、政友會でも、民政黨でも、其黨としては皆盡く前科者だ、其中には君子も居る、賢者も居る、然し連帶責任としては、此等の政黨を墮落せしめ、腐敗せしめ、而して爲めに人心を惡化せしめ、危險思想を釀成せしめ、黨爭にのみ沒頭して、內外の政治を荒廢に歸せしめ、國利民福を度外視して、竟に今日の日本のやうな土崩瓦解の現狀を招來せしめたものは、皆彼等の罪である。故に、今度は一切舊議員を撰ばず、專ら新に出て來る候補者を撰べよ、勿論此度出て來る候補の連中の中にも、つまらぬ者、惡いものもあらう。然し先づ其を撰んで、其れが惡かつたら、更に次の總選擧に新候補を撰ぶのだ、一言でいふと、政友會でも民政黨でも、何方でも可い、其の黨の出すところの新顏ばかり撰んで、舊顏を皆盡く撰ばぬことだ、左樣すると、其顏の新なると同時に、又た新なる政治が出て來るだらう。否、左樣いふ風にすれば、諸君が政治家を左右することになるから、今度は成る可く諸君の爲めに圖る政治家が出て來て、各々善政を競ふから、ソコで政界が一變するのだ、よいか何處までも、此迄のやうに政黨に隷屬せず、寧ろ彼等をして諸君に隷屬せしめよと、そう說き聞かすのである。

ソコで斯くの如く、宗教家が聯盟して、各寺、各社、各教會で吐鳴ると、今日の政

590
244

黨や、其の政黨から出て居る爲政者は、必ず弱るか悔ゆるか、左なくば、ウンと壓迫して、我等を酷い目に會はすかも知れぬ、左れば我宗教家諸君一ッ酷い目に會はされやうではないか、予輩は本年七十一歳モー古稀だ、モー十分に生き長らへた、耶蘇は三十で死んだ、之に比ぶれば、四十年以上も長生した、モー十字架にかゝつても憾はない、諸君も亦た各々宗祖の往古に還りて、死を以て今日の國難に當つたら怎だ、勿論我等宗教家の任は、第一に神と人との關係を說き、專ら其の人の魂の亡びつゝあるを救ふに在る、然し其人の魂を救ふの仁心あるもの、愛心あるもの、慈悲心あるもの、爭でか此の國家の亡んとするを座視することが出來やうぞ、是し予輩が玆に宗教家の總動員を起して以て、我が今日の國家と其國民とを救はねばならぬと絕叫するゆえんである。

『諸教の批判』の批判に答ふ

（左の四題は讀賣新聞に出た反駁論に答へたものである。）

松平俊子さまにお答する

松平俊子さまのは、まだ予輩の所論の中央にも入らぬ時の駁論であつたから、全編を見られたら、お分りになつたこと、思ふ。お說は要するに、假設でも漸々積功德の結果本物になる。科學丈けでは駄目、佛教哲學で解決せよ、お前の論の如きは佛教の論法を以て戰へば容易に破ることが出來る、といふことで、之を結べばつまりお前は佛法を能く知らぬとの事になると思ふ。言葉は違ふも先づ其んな事になると思ふ。ソコでお答へは、左樣ですか、然しトント予輩の議論の駁論にはなつて居ないと思ひますが、

590
244

と云ひたいばかりである。

坂田博信氏にお答する

法華經が釋迦沒後五六百年に出來たと云ふ論證は何處にあるとの議論。之れ御尤もである。然しつまり經卷として現れるまでには、五六百年の星霜を閲みしたであらうと云はるゝのだから、氏自らも大體之を承知せられることになると思ふが如何です。

又予輩は釋迦を無學の徒であると云つたのでない。今日の新知新學を知らぬ、從つて其知識の範圍が狹いと云つたのである。然し釋迦の悟達は偉いものであるとの論には予輩も同意見である。又科學云々と云はれたが、之れも予輩の所論の中央にも入らぬ時の駁文ゆゑ、予輩の全文を見られたら分つたであらう。

逢坂生に答ふ

逢坂生の所論に對しては、一番にお答へし度い氣がする。予輩のは畢竟基督教より換骨脫胎して來て居ると云はれるが、此れは予輩も首肯する。而して聖書無謬說も、贖罪說も處女懷胎說もどうやら予輩と同意見であるやうであるから嬉しい。然し唯だ宗教は人格に由る、議論ばかりでは駄目である、歐洲に起つたポジチヴイズムも五十年經たぬ中に滅びて仕舞つたとの事、之れは予輩も承知して居る。然し逢坂生はまだ、予輩の結論の增補の方を讀まぬ中に論ぜられたのであるから、今日では我道會がポジチヴイズムと少し違ふて居ると云ふことが分つたであらう。尤も予輩が其人であるかないかは、五六十年後にならずば解らぬであらう。然し其は人の批評に任すのみである。

590
244

辻村楠造氏に答ふ

辻村氏は、此宗教欄に出した、三十八回に渡る予輩の所論を盡く讀んで居られぬやうに見える。色々と論ぜられて、其の博學には驚かされたが、大抵は予輩の議論に却て裏書されたと思ふ氣がするのみである。而して予輩を單に學知の徒であると思ふて居られるやうである。故に甚だ失禮だが、モ一度此の宗教欄に出た予輩の議論を篤と讀んで戴きたいものである。

之を要するに、諸君の議論には、一向嚙付かれたやうな氣がせぬ、予輩が不死身であるからか、神經遲鈍であるからか知らぬが、怎も只だ左樣で御座るか、と云ふ樣な氣がするばかりである。

斯く云ふと松村は冷淡だ失禮だ、其れは宗教家の態度でない、モー少し眞面目に返答して貰ひたい、と謂はれるであらうが、然し怎も予輩は斯の位に挨拶するより外は無いやうに思ふのである。而して只だ判決は讀者諸君に任すばかりである。

『統一』誌に出た本多日生氏に答ふ

一

本多君能く出て來て呉れた。怎も今日の樣に、諸宗教の眠て居るのは、如何にも心外であるから、老を忘れて出て來て、一つ各方面に目を醒させたいと思ふて、隨分思切

590
244

つた事を云つて見たが、質問とか辯駁とか言つて出て來る者が、殆ど無數と云つてもよい。讀賣新聞社に來て居るもの丈でも數十通ある。又予輩のところへ來て居るものでも、なか〳〵ある。しかし皆君の門下生の樣なもの、若くは玄人より聞き嚙つた上に、自ら少し御經を讀だ位の素人なので、怎も本氣になつて相撲を取る氣になれないのだ。ところが君が堂々と出て來て呉た。君と予輩との個人關係は別として、一つ御互に研究もし、辯難もし、又た一しよになつて、世の宗教家を搖り動かして、我が精神界に一片の火を投じやうではないか。ソコで少しく君の所説に就いて、意見を加へて見やう。

第一、予輩は法華經の内容や實質如何を云ふのでない。此迄釋迦の直説を直ぐに書いて傳へて居たのだと説いたのを、モー今日は赤裸々に之は釋迦滅後五六百年後に出來たものと言つたら怎だと云ふのである。君は抹殺博士や、大乘非佛説などを持つて來て、色々と言ふが、詮ずるところ矢張り釋迦の直説を書いたものだと云ふのか、即ち五六百年後に出來たと言ふのを、嘘だと云ふのか、怎も其れがハッキリしない。或は釋迦の直説でなくとも、兎も角釋迦の心の中にあつたものだと云ふのか、其れなら其れで可いが、其れを明白に言つて貰ひたいのだ。

二

色々の御經を持ち出して、佛法の有難いこと、又た其の眞理である事を説くが、それは有難いことも眞理であることも隨分あらう。しかし何千卷と言ふ多くの御經を、皆悉く眞理だ有難いと説くのは、無理でないか。つまり予輩の議論は、バイブルでも御經でも、人の書いたものだ、當時の知識の書いたものだ、當時の體驗者の書いたものだ、而して其の書いたものが、已に人である以上は、其れに間違の有るのは當り前だ。即ち知識學問は段々と進歩發展して行くものだ。其を何千年前に云つたものゝ言を、何時までも金科玉條とする譯に行かんと言ふのが、予輩の議論である。故に今度我道會では、別に『道會バイブル』や『道會四書』や『道會老莊列』を作つたが、全編

590
244

の三分の二位より採らなかつた。即ち今日になつては、其の中に詰らんと思ふことがあるから、其れを除て唯だ今日でもなほ尊い眞理であると思ふもの丈を採つたのである。つまり我道會は、萬物も人間も進化しつゝあると云ふ見地に立つて、論ずるからである。否、此の進化法は、已に科學上事實となつて居るから仕方が無いでないか。

三

そこで君は釋迦を完全無缺のものゝ樣に說くが、其は無理である也、丁度今まで耶蘇を神の生み給へる獨り子で、神其のものであると說いたのと同じことで、こいつは最う通らんぜ。そう言ふ風に說くから、今日の學問知識ある者が、馬鹿にして嗤ふて仕舞ふと言ふのである。

四

要するところ、佛法には佛法の眼目が有る、哲理が有る、主張が有る、其の眼目哲理主張は、釋迦の發見したものにしても、其の發見すべき眞理、實物が無始無終に存在して居るからである。そして其の眞理實在を認むる者は、唯り釋迦に限つたものでない。我々も釋迦を籍らずして發明し發見すべき筈だ。否、今日の樣な學問知識の開けたる世に生れた者は、釋迦よりヨリ明白に、ヨリ確實に其の物を認むべき筈であると說くのである。つまり釋迦や耶蘇や孔子に隷屬するな、眞理實物其に向ふて直進しろ、そして釋迦や耶蘇や孔子以上に成れよと、言ふのが予輩の結論である。尤も之を凡俗に强ゆる事は出來ない、しかし御互に此の有難い世に生れて居る以上、釋迦や耶蘇や孔子に負けまいと奮發しやうでないか。否、釋迦や耶蘇や孔子の言つた事を取り次いで、それ以上に出ねばならぬでないか。否、いつまでも釋迦や耶蘇や孔子や、その說いたバイブルや、御經や、經書に喰つついて居る樣なことでは、到底今日の樣な宗教革命時代に、應ずる事が出來ないぞと言ふのである。

590
244

五

尤も今度君の所説に感心した事が幾らも有る。君は法華經を外部より見たら不可ない。之を錦の袋に入れて有難く思へよと言つて廻つたところで、何もならぬと言ふ。之は有難い御説法である。又た南無妙法蓮華經と言つて、大きな聲で吐鳴れば吐鳴るほど、ドン〳〵太鼓を叩けば叩くほど、御利益がある、有難味が増すと思ふものゝ如きは、本當の法華經信者でないと言ふ、之も有難い。又た御地藏様や御藥師様の様なものは、論ずる價値もないと言ふ、之も有難い。畢竟するところ、法華經の説くところを身に實行するに於て、始めて其の有難味も價値も出ると言ふ御論は、立派なものだ。予輩の言ふのは其處だ。しかし今日までの説き方を聞くに、大きな聲で南無妙法蓮華經と吐鳴り、ドン〳〵太鼓を叩き日蓮上人を拜んでさへ居れば、病氣も癒る、商賣も繁昌する、災難も免かれると言ふ樣であるから困るのだ。今日でも其信者の方が多いであらうから、怠か猶ほ其人々を警めて呉れ給へ、否、そういふ事を云つたり説いたりする信者の多い間は、今日の開け來る世には、つまり低い宗教として尊まれず、御利益教として馬鹿にされるから、耶蘇教でも、佛法でも、此處に氣を付けねばならんと言ふのが、否、氣を付けねば、だん〳〵衰へるぞと言ふのが、予輩の論據である。つまり佛法と言ひ、法華經と言ひ、それが悪いと言ふのではない、從來の説き方を變へよと言ふのである。即ち之迄素人玄人の區別を立てゝ説いて居たのを、モー素人の方は止めて、玄人の方許りにしたら怠だと言ふのである。

六

君の信仰の根據と題して書いた議論は、多岐に亙つて居る。そして三十六頁にもなつて居るのだから一々批評しないが、つまり予輩に關する丈の要點は先づ斯んなものであると思ふが、なほ引き續き論じて見やうぢやないか。

590
244

『國教』誌に出た安房玉太郎氏に答ふ

君は吉田と言ふ道會員と、色々問答されたことを書いて、つまり吉田が閉口して、明道會の教を受けると言つて歸つたと言ふ樣な事を、書いて居らるゝが、其の吉田と言ふものには、一向心當りがない。又其人が予輩の所に來て、まだ其んな話をせぬから解らぬが、折角わざ〳〵『國教』誌を贈つて來られたから御答へする。

君は曰ふ『道會の皇天上帝や、永生などの事は、ハッキリして居ない、其れより明道會に來つて、神人交通の事實を見よ。目に物見せて呉れる』と、そして又た『氏神や祖靈を奉齋しなければ駄目だぞ、君の祖先の靈魂は野良犬の樣に、當て途もなく方々にさまよひ歩いて居る。之を祀るか祀らぬかの態度如何に依つて、祖靈が幸福にもなり不幸にもなる』と言ふのが論點らしいが、實に抱腹絶倒である。しかし明道會の會長の岸一太氏は醫學博士であるから、世の信用を博する譯でもあらうし、又其の心靈的現象の事實を見て驚く者も有るだらう。然し之は予輩が讀賣新聞の『諸教の批判』の中に外道として詳しく書いて居る通りで、此の方面に關しては、岸一太先生よりも、予輩の方が餘程先輩である。予輩は四十年前より、それを研究して居る。そして過日も、ラヂオで幽靈の御話をした樣な譯だが、今日のやうに正道が衰へた時には、外道が流行するもので、兎に角目に物見せるのだから、大官でも、大將でも、ビックリして其の信者となるのだが、予輩は孔子と共に此の紫の朱を奪ふを惡むのである。ソコで君も折角宗教方面に御熱心であるやうであるから、どうか正道より入つて耶蘇や弘法と同じく、正道を說きながら此外道の方面を實驗もし、又人にも之を見せて、靈的方面の不思議を說て下されたら如何であらうか。

590
244

松村介石先生主幹

定價金參拾錢　道　毎月一回一日發行

的然たらざるが故に、未だ世に其存在を知らぬ者もあらふが、闇然として日々に章かになりつゝある我が『道會』發刊の『道』雜誌は實に宗教界の野に呼ぶる聲である。道會の主張は至極簡明なる信條、即ち、信神、修德、愛隣、永生の四綱領で、既成宗教の如く後世を念じ、天國にゆくのが目的でなく、神命を奉じて此の世の政治も、教育も、實業も、否あらゆる現社會の事物を改善革新せしむるを以て目的として居る。併し先づ其の人格の養成より始めようといふのであるから、精神修養のため、又は既成宗教に飽き足らず、新たなる信仰の生命を得んと熱望して居るものには殆ど唯一の雜誌であると確信す。牛歩二十數年にして、今や山城より其の道光を放たんとして居る。

東京市神山外五九番地　道會事務所　振替口座東京二六二五番

諸教の批判　終

此の書の出版に就ては松村先生の年來の交友である、前田武四郎氏の援助に預りたる事を、此に特記して感謝の意を表す。

道會

590
244

道會事務所發行
東京市外澁谷町神山五九
振替東京二五九二六番

松村介石先生著

立志の礎

定價壹圓・送料四錢

此れは出版以來、天下幾十萬の青年を發奮興起せしめた有名な書で、今日四五十歳の人に聞て見給へ、若夫れ其人が精神家であるものならば、大抵皆此書を讀んで居るから。

リンコルン

定價壹圓・送料六錢

此れも立志の礎と同樣に、隨分當時の青年に能く讀まれた書である。今日でも、苟も天下に其志を伸べんと欲するものは、之を一讀せよ。偉人たるべき道、炳乎として其れ爰に明かなり。

十牛圖解

定價參拾錢・送料貳錢

此れは禪家のものに、先生が、先生一流の解釋を加へたるものである。尋牛より入鄽に到るまで、一々實際の事例を引かれ居るところ、汎神的難解に優ること萬々なり。

男女青年訓

定價八拾錢・送料四錢

世は移る、思想は變る。然し其間に不磨の眞理、不朽の道なるものが無いではない。松村先生は、宗教界の革命を叫ばるゝほどの急進家である。而かも不磨の眞理、不朽の道を說て、目下の青年男女を懇導せられんと欲して著せられたのが此書である。

松村介石先生著

日本改造論

定價三十五錢・送料四錢

今日の行詰つた日本を、改造する具體的の先生の意見は、皆納めて此の書にある、今では政治教育と云ふ語も流行するが、此の語は恐らく先生の創始せられたものである。立憲の何物たるを知らざる國民に、是非之を讀ませたい。

放懷

定價 並製五圓 特製七圓・送料拾八錢

此は『道』誌上の每號に、口繪として現はれたるもの、文は簡潔思想は奇拔、而して時に悠々自適の仙となり、時に慷慨撫劍の士となり、時に懇諄世を化するの夫子となるところ、溥博淵泉時に之を出すのもの歟。

信仰五十年

定價貳圓・送料八錢

此は先生が十九歳より、五十年間の信仰生活を叙述せられたる最初の著である、讀み去り讀み來れば、此の五十年の長い間を通じて、先生が如何に奮鬪せられたかゞ分る、而して無限の寶物を此の間より穫ることが出來る。

新宗教

定價二圓廿錢・送料拾錢

此は道會の由來を說き、更に先生が數十年間に於ける、宗教的眞理と、其の體得とを述べられたるもの、道會員は勿論、苟も宗教を求め居らるゝものは必ず三讀せざるべからざるもの也。

590
244

警世自戒

定價二十五錢・送料二錢

之は先生が讀賣新聞の依頼に應じ、其宗教欄に於いて、毎日目下の感想を述べられ、夫れが五十回續いたのを一書としたものである。中は宗教談あり、政治論あり、人物評あり、例によつて何物にも束縛せられず、思ひ切つて其の肺肝を吐かれた處に價値があるのである。諸方より是非一書にして貰ひたいとの依頼あり、殊に佛者の方に感動を與へたかその方面に注文多し。

道會四書

定價六拾錢・送料貳錢

此は先生が道會教科書の劈頭第一に選輯せられたるもの、大學、中庸、論語、孟子の四書より抄拔し、四書はこれ丈で十分なりと指定せらる、道會員は必ず講讀せられたし。

道會詩集

定價八拾錢・送料四錢

此れは日本と支那の兩國に於ける、古今の詩傑は勿論、聖賢君子、並に志士仁人等の肺肝より出たる吟咏を集めたるもの、啻に我が精神修養の資たるのみならず、憂國慨世の氣を鼓して、今日の日本を濟はんと欲する、我黨の必ず座右に置き、且つ放吟以て我懷を攄ぶ可きものである。今やツマらない俗謠や、西洋輸入の感傷的歌樂の歡迎せらるゝ時、我黨は其の類を異にし、天下の同志と共に、斯う云ふ詩を吟じ、以て眞に豪壯たる氣象を養成したいのである。

道會バイブル

定價特二圓三十錢 並一圓八十錢・送料十二錢

此は松村先生が多年間學究の結果、最も新たに開け來る學問智識に從ひ、新約全書の大切なる所を選んで、之に註釋を加へられたものである。今日のバイブルを學ばんとせば、此の書に若くはないと思ふ。

道會老莊列

定價六十錢・送料二錢

老子莊子列子の中より、修養になるべきものを選ばれたものである。この三書は、文章が難しいのと、意味が深いのと、其比喩が奇拔なので、一寸讀み難い。其を誰にも解る樣に書かれたものである。

道會四書講義

定價壹圓・送料四錢

松村先生は數十年以前から、繰り返し〳〵て、此の四書を解釋せられて居るが、之は道雜誌に連載せられた最近のもので啻に字義の解釋でなく、今日の實際に當て欽めて訓戒せられたものである。

道會の栞

定價五錢・送料貳錢

此は、ほんの小册子なれども、松村先生が、畢生の力を盡して書かれたと云ばるゝもの、道會の主義主張の骨子皆此の内にある。

高嶺の月

定價五錢・送料貳錢

此は東京中央放送局の依頼で、道は一つであると云ふ主義主張を放送したものを冊子としたもの、即ち道會の四綱領を各宗教より引き來たつて、說明したもの。

智仁勇の解

定價參錢・送料貳錢

此も東京中央放送局の依頼にかゝるもの、孔子の『智者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は懼れず』とあるのを說明し、今日の我日本人の此の修養を怠て居るのを戒しめられたものである。

590
244

松村介石先生著

莊子修養の九階段

定價八錢・送料貳錢

此れは先生が、道會教科書の内に入れられて居るもので、「道會老莊列」の内にも出て居るが、玆には之れ丈けを一小冊子として出したものである。此莊子修養の九階段は、先生が、何十年來説かれて來たもので、既に諸君の中幾度も先生の口より之を聞いた事があるだらう。然し之を筆記して居るものは、少なからうから、定めて諸君の歡迎せらるゝものに相違あるまい。

東西思想の融和

定價五錢・送料貳錢

此れは松村先生が、東京中央放送局の依頼に應じ、修養講話の題下でなされたものである。御承知の如く先生は元、朱子學で、其の後基督教に入り、更に諸宗教に渉り、最後に陽明學を悦び、遂に我が道會を起して、四綱領で以て、宗教の眞髓を叫ばれるやうになられたのであるが、此の冊子を見れば、如何に先生が東西の思想を其懐に融合體得せられて居るかゞ解る。

人生とは何ぞ

定價八錢・送料貳錢

此れは先生が人類の起因より説き起し、更に宗教の起原に及び、夫れより今日存在してゐる諸宗教の起原と、其の發展を講じ、結局諸宗教の歸する所は、信神、修德、愛隣、永生の四つである事を、該博の學智と、先生多年の體得より説かれたものである。人は何處より來り、何を爲し、何處へ行くのか。即ち過去、現在、未來を通じての確乎たる人生觀は如何、之れは一小冊子なれども、之を讀めば恐らくは誰でも首肯するであらう。而して然り安立の道此に在りと叫ぶであらう。

昭和四年十二月廿五日印刷
昭和五年壹月拾日發行

定價 金三十五錢
（送料金四錢）

著者 松村介石
發行者 東京市外澁谷町原二十七番地 香山吉助
印刷者 樺濱市中區福富町仲通三十八番地 間瀨寛吉

不許復製

發行所 東京市外澁谷町神山五九番地
振替東京二五九二六番 道會事務所

590
244

590
244

590
244